

# 近代日本版画家名覧 (1900—1945)

## 〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
  - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
  - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	森 登（学藝書院）
樋口良一（版画堂）	
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

## 戦前に版画を制作した作家たち (9)

【さ】

齋木原泉 (さいき・げんせん)

1922(大正11)年関西学院の美術部「神戸弦月画会」が主催する創作版画展(2.23～26 三宮三〇九番館)に木版画《古〔木〕枯し吹く頃》《林檎を持てる裸体》を出品。出品時、京都に住む。【文献】『創作版画展覧会目録』(神戸弦月画会 1922) (三木)

齋藤五百枝 (さいとう・いおえ) 1881～1966

明治末から昭和期に至る代表的挿絵画家として知られる。1881(明治14)年12月21日千葉県上総国長生郡一宮町本郷村3603番地に生まれる。父俊郎、母まさの七男。一宮尋常高等小学校卒業後上京して京華中学進学。白馬会研究所で学んだ後、1904年9月東京美術学校西洋画科選科入学。岡田三郎助に師事。同年第9回白馬会展入選、継続的に白馬会に出品。在学時に美校仲間の版画誌『L S』に参加、『ハガキ文学』、『文章世界』にコマ絵を投稿。1906年11月『婦人世界』に挿絵掲載。1908年東京美術学校西洋画科卒。同年10月の第2回文展に《曇の山》入選。挿絵は富山房『学生』、講談社『少年倶楽部』は創刊から主力画家として佐藤紅緑・大仏次郎・吉川英治・佐々木邦等の著作に挿絵をつけて高評を得る。その他、博文館の『家庭雑誌』・『英語世界』等で活動。新聞の美術記者、日活映画の美術部主任等の仕事にも従事。1941年に野間挿絵奨励賞受賞。晩年は染色研究に熱心であった。版画では美術雑誌『L S』第2号(1905)に石版画《道路工事》掲載。1929年に主情派美術協会からの『主情派現代風俗版画集』に収める多色摺木版画《行水の図》を第1回発表頒布。1966(昭和41)年11月6日、東京中野区沼袋の自宅で脳出血のために逝去。享年84。【文献】『齋藤五百枝展 解説書』(弥生美術館 1997) (岩切)

齋藤英蔵 (さいとう・えいぞう)

長野での創作版画運動は、日本各地の版画同人誌に作品を発表していた小林朝治が中核をなしていた。それは1933年、小林が平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」(須坂小学校)を契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画誌『櫟』(1933～1937)を発行した事に始まる。当時、齋藤は会場となった長野県上高井郡須坂小学校に勤務しつつ、この『櫟』の編集と事務に第6輯まで携わり、その後も同誌に作品を発表し続ける。第1輯(1933.8)に《器物》、第2輯(1934)に《賀状》、第3輯(1934.7)に《野尻風景》、第4輯(1934.11)に《風景》など、第5・9輯を除いて第12輯まで作品を発表。また、須坂小学校での「第2回版画及び図画講習会」(1934.8.19～22 講師：平塚運一)では、齋藤の提案により受講者が制作した作品を『臥龍山風景版画集』(信濃創作版画研究会 1934)として刊行するなど自身の制作以外にも会のために尽力を惜しまなかった。その版画集には《造船所》が掲載されて

いる。【文献】『須坂版画美術館 収藏品目録2 版画同人誌「櫟」「臥龍山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

齋藤和久 (さいとう・かずひさ)

慶応義塾普通部3年在学中に制作したエッチング作品が西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第61号(1937.11)に掲載されている。同校にはエッチング教育に熱心な教師仙波均平がおり、毎年美術部の生徒作品展覧会が開催され、齋藤は3回目となる同展(1937.10.17～18)に3作品を出品している。『エッチング』に掲載されたものはそのうちの1点で、西田が出品作品80点の中から主な作品として紹介したものである。【文献】「慶応普通部美術部エッチング展」『エッチング』60(1937.10) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

齋藤菊夫 (さいとう・きくお)

慶応義塾普通部2年在学中に制作したエッチング《水郷》が西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第50号(1936.12)に掲載されている。同校にはエッチング教育に熱心な教師仙波均平がおり、毎年美術部の生徒作品展覧会を開催している。《水郷》は同展(1936.11.8開催)に出品されたもので、西田が出品作品60点の中から主なる作品として紹介したものである。【文献】「慶応普通部のエッチング」『エッチング』49(1936.11) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

齋藤 清 (さいとう・きよし) 1907～1997

1907(明治40)年4月27日福島県会津坂下町に生まれる。1912年北海道夕張に移住。1921年尋常小学校を卒業して小樽に移り、薬局や北海道ガスでの見習いを経て18歳で看板店に就職。1927年自ら看板店を開く。絵は幼時より好きであったが長く自己流で、小学校の図画教師・成田玉泉にデッサンや油彩画を習い始めたのは1929年であった。また成田の紹介で棟方志功に出会う。1930年に東京を訪れ、この地で学ぶ必要を痛感して一旦小樽に戻り、1931年友人に店を譲って上京。広告や挿絵で生計を立てながらはじめ油絵を手がけ、翌年第9回白日会展に《高圓寺風景》を初出品して初入選。以後1933年に第1回東光会展入選、1935年第10回国画会展に《樹間風景》で入選、1939年には第26回二科会展でも《裸婦と少女》が入選を果たす。版画着手は1936年、安井曾太郎の求龍堂版《正月娘姿》に感激して木版画を試み、同年の第5回日本版画協会展へ《子供座像》《子供(少女)》を出品、初入選となる。1937年第12回国画会展でも《郷の人》《子供座像》が入選するが、翌年は落選し、数寄屋橋の研究所で勉強をし直したという。この1938年には金子誠治らと「小樽創作版画協会」を結成し、小野忠重に誘われて第2回造型版画協会展に《果実》など5点を出品、また同じ頃永瀬義郎の『版画を作る人へ』を読んで自由な版作りを学び、彫り進みによるモノタイプなどを試みている。美術雑誌でゴーギャンやムンク、ルドンにふれて共鳴し、平面構成に影響を受けるのもこの頃である。造型版画協会では1939年に会員と

なり、第7回展まで連続出品、特に1942年の第6回展へはエッチングもまじえて大量に出品している。1940年故郷会津をテーマに制作、白と黒に純化された雪景を刻んで版の絵の要諦をつかむ。1942年銀座鳩居堂にて初の版画個展「斎藤清版画展」を開催。1944年朝日新聞社へ入社、カットなどを手がける。この年には第13回日本版画協会展に《会津坂下》を出品して会員となり、やはり同年（1943年とする資料もある）恩地孝四郎の一木会に参加している。戦後はまずは1945-46年に富岳本社が出版した『東京回顧図絵』『日本民俗図譜』『日本女俗選』への参加があり、日本版画協会や国画会（1949年に会員となる）に所属しながら活動を続けてゆくが、1947年の東和工芸ギャラリーでの個展や翌年のサロン・ド・プランタン展での《ミルク》の一等賞受賞（同展は同じ年にアメリカ国内を巡回）、1952年のアーミー・エデュケーション・センターでの個展により、とりわけ駐日アメリカ人に注目されるようになり、その評価を追う形で国内の新聞社主催展に数々招待されるようになる。1951年の第1回サンパウロ・ビエンナーレ展では《凝視（花）》が在サンパウロ日本人賞を受賞、日本人作家が国際展で受賞を重ねてゆく先駆けとなった。以後ルガノやリュブリアナなど国際版画展への出品・受賞を続け、国内でも1951年の「第1回 斎藤清 創作版画個展」（於日本橋三越、以後毎年開催）や翌年の「現代創作版画六人展」（於神奈川県立近代美術館）、1957年の東京国際版画ビエンナーレへの招待出品などによりいよいよ評価を高めた。アメリカ国務省とアジア文化財団の招待による1956年の渡米（アメリカ各地に半年間滞在）以降、海外での展覧会出品や公開制作、実技指導、講演なども多数行っている。作風は1950年前後に固まり、単純化したフォルムを巧緻に構成し、濃厚なマチエールで表出する手法により人体や仏像、日本の古都や異国の風景を刻んだ。木目を多用するなど版面の表情も多彩、またモダンな眼で日本の伝統美を再構築する表現世界は独自である。1970年には1930年代以来模索していた「会津の冬」の連作を本格的に開始、没する直前までに100点を超える作を残してライフワークとした。1983年には神奈川県立近代美術館で「斎藤清展」が開催され、245点もの作品により版業が回顧されている。1987年に1970年から住んだ鎌倉を離れて福島県柳津町に移住、1997年には福島県立美術館で450点余を展覧した『斎藤清の全貌展』開催、同年10月やないづ町立斎藤清美術館オープン。同年〔1997（平成9）年〕11月14日、福島県会津若松市にて逝去。【文献】『斎藤清版画集 会津の冬』（講談社 1982）／『斎藤清の世界 1931～1984』（あすか書房 1984）／『日本美術年鑑 平成10年版』（東京文化財研究所 1999）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）／『生誕100年 斎藤清展』図録（福島県立美術館 2007）／『創作版画誌の系譜』（西山）

斎藤昌三（さいとう・しょうぞう）1887～1961

1887（明治20）年3月19日神奈川県高座郡座間町（現・座間市）に生まれる。本名は政三（しょうぞう）。1923（大正12）年の関東大震災で戸籍消滅

以降は昌三と改名。俳号桃哉。住いのあった茅ヶ崎に因み湘雨荘、少雨叟、未鳴とも署す。横浜通信省・大蔵省建設局などを経て、1917年にアメリカ貿易店五車堂に勤務。この頃から生涯を通じて明治の書物への愛着と知見を深め、後に明治もの書痴の「三尊」と云われるほどの先達に。1920年に趣味雑誌『おいら』（横浜郷土社）を創刊。趣味人や俳人らとの交友を広く持つ。1925年『愛書趣味』（愛書趣味社）を創刊。1931年には「書物展望社」を興し、庄司浅水・柳田泉らと雑誌『書物展望』を創刊。限定本を主とした出版社として『閑板書国巡礼記』（1933）や『日本の古蔵票』（1946）など自身の著作のほか、西村貞著『日本銅版画誌』（1941）、藤田嗣治著『隨筆集地を泳ぐ』（1942）など数多くの書物を誕生させた。この間、発禁本や多角的な文献蒐集により、専門家間にも知られるようになり、1927-30年刊行『明治文化全集』（日本評論社）の編集に参加。木村毅との交友関係から改造社『現代日本文学全集』（1927～1931）に参画し、別巻の『現代日本文学大年表』の編纂に加わる。1932年には『現代筆禍文獻大年表』（粹古堂書店）を編纂。文学や書誌学に加えて、日本書票協会に所属し、蔵書票の蒐集・研究を、また性風俗・民俗学的な性神研究などを行なった。晩年は茅ヶ崎市立図書館名誉館長を務め、1961（昭和36）年11月26日逝去。書誌研究者。随筆家。なお、1980-81年に『斎藤昌三著作集』全5巻（八潮書店）が刊行されている。

版画制作では、蔵書票の蒐集をしていたことから、青森の佐藤米次郎と知り合い、自らも蔵書票を作り、佐藤が発行した『サトウヨネジロー蔵書票集』第3号冬の集（1934.12）に《裸婦》を発表。また、やはり佐藤が発行した『趣味の蔵書票集』第2回（1937.8）に写真銅版《踏絵》と小文「蔵票界愚感」を寄稿している。【文献】『日本近代文学大事典 第2巻』（講談社 1977）／『日本人名大事典 現代』（平凡社 1979）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）（加治）

斎藤治良（さいとう・じろう）1910？～没年不詳

岡本唐貴「日本のプロレタリア美術」（『日本プロレタリア美術史』造形社 1967）によれば、1910年（明治43）に生まれる。「室順治」と同一人物であり、「阿部治良」とも名乗ったとされる。作品の発表はプロレタリア美術運動期に限られ、それ以外の美術活動は知られていない。展覧会への最初の出品が確認できるのは、1928年11月から12月開催の第1回プロレタリア美術大展覧会である。この展覧会に斎藤は、本名と思われる「斎藤治良」の名で、《若きマルキストの像》《労働組合演説》などの絵画とともに「版画数種」を出品している。この出品は造型美術家協会所属の作家としてであったが、同協会展への同一人物らしき作家の出品は確認できない。その後第3回プロレタリア美術大展覧会（1930）に「室順治」の名で、油彩画《習作奥野田》とともに《ダラ幹の排撃》《ピオニール》《集会》などの版画31点を出品した。それらの版画出品について岡本唐貴は、冒頭に挙げた文献で「才気喚潑たる木版画を多数出品した」と回想している。つづいて同展第4回展（1931）に《市

電××車庫文化クラブ》《嘘を教える先生反対》の2点の版画、工芸作品《万国の労働者団結せよ》(壁かけ)を出品した。このときの工芸作品には、展評のなかで「工芸の新形式に躍進的な進出を示してゐる」と評が寄せられた(『アトリエ』9-1 1932.1)。プロレタリア美術運動における版画は美術の大衆化に功を奏する表現形式として注目され、運動のリーダーであった岡本唐貴から齋藤は、吉川審、小野忠重とともに「我々の版画家」と呼ばれた。またプロレタリア美術の代表作品を掲載・編集した『日本プロレタリア美術集(1931年版)』(内外社 1931)に、5点の木版画が掲載された。生没年不詳。【文献】岡本唐貴・松山文雄編著『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967)(滝沢)

齋藤精次郎(あるいは精二郎)(さいとう・せいじろう)

1932年1月1日から7日まで、大阪ダイヤ画廊に於いて文楽木版画展を開催。『文楽座初春興行』『文楽座三月興行』(いずれも木版絵葉書3枚組)の刊行がある。【文献】『みづゑ』326(1932.4)／『菟堂版画目録』38(1997)(樋口)

齋藤赤心(さいとう・せきしん)

1927(昭和2)年、教員として勤務していた福岡県立福岡高等女学校(現・県立福岡中央高等学校)の図画授業で、エッチングを教材として生徒に指導をはじめた。日本エッチング研究所の西田武雄は、女学校の授業でエッチングを教材として正式に取り入れたのは齋藤が最初であるとしている(『エッチング』48 1936.10)。その西田を講師に招きエッチング講習会を開くなど、版画教育としてエッチングを教えることに力を注いだ。当時、エッチングの材料は市販されておらず、銅板を切断するところから始め、磨き、グラウンド加工などを試行し、いろいろな工夫をしながら授業の中に組み入れていった。エッチング研究所機関誌『エッチング』第47号(1936.9)に寄稿した「エッチングを教材として取入れるまで」や第57号(1937.7)の「新教材『エッチング』の魅力」は教育実践の報告書である。

版画作品としては銅版画で葉書を制作し、大分の武藤完一宛に送っている。それ以外、外部の版画同人誌などに発表した形跡はなく、武藤が発行していた版画誌『九州版画』第24号(1941.12)の会員名簿に名を連ねてはいるものの、自身の作品は掲載されていない。日本版画奉公会会員。1943年4月当時、福岡市平尾平和町343に在住。【文献】『エッチング』47・48・57・123(加治)

齋藤大紀(さいとう・だいき)

東京の城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会(1937.11.25～29 講師：平塚運一)に参加。講習会の記念に創刊された版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《頂上(八合目にて)》、第2号(1938.1)に《虎》を発表。教師対象の講習会だったことから、当時は日本橋教区の教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

齋藤種臣(さいとう・たねおみ) 生年不詳～1944

千葉県生まれか。1920(大正9)年に本橋華門と版画展(7.3～13 渋谷・トンボヤ)を開催。翌1921年東京美術学校予備科西洋画科に入学。在学中、1922年の第3回中央美術展に油彩画《風景》、1925年の第2回白日会展に油彩画《雪》、1926年の第13回日本水彩画会展に木版画4点が入選している。同年(1926)東京美術学校西洋画科を卒業。卒業後は白日会展(3・5・6回 1926・1928・1929)、光風会展(14～17回 1927～1930)などに出品を重ねる一方、1928年には第9回帝展に油彩画《白衣立像》が初入選。1929年の第10回展、1934年の第15回展、1936年の文展無鑑査展にも出品している。その後、ビルマ新聞のグラフ編集部長となり、軍属としてランゲーンに赴いたが、1944(昭和19)年4月18日同地で戦傷死した。【文献】『中央美術』6-8(1920.8)／『アトリエ』3-3(1926.3)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

齋藤常勝(さいとう・つねかつ)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)在学中に、同校生徒が発行していた版画誌『刀』に第2輯(1928)から参加し、1931年に同校を卒業するまで作品の発表を続ける。第2輯(1928)に《酒倉》、第3輯(1928)に《風景》、第4輯(1929)に《河岸》、第5輯(1929)に《或る玄関の印象》、第6輯(1929)に《オモト》、第7輯(1930)に《静物》、第8輯(1930)に《支那芸人》、第9輯(1930)に《夜の風景》、第10輯(1931)に《無題》を発表。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

齋藤壽男(さいとう・ひさお) 1910～1998

1910(明治43)年、栃木県上都賀郡北押原村(現・鹿沼市)縦山に生まれる。川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に在学中、同校生徒が発行する版画誌『刀』の創刊から参加し、その第1輯(1928)に《つぶらみ》、第2輯(1928)に《山脈》を発表。1929年同校を卒業し、東京高等師範学校(現・筑波大学)に入学。卒業後は教職につき、1969年定年退職。1998(平成10)年逝去。宇都宮中学校卒業後、版画制作は行なわなかった。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

齋藤 博(さいとう・ひろし)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)5年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)を再刊しようと鈴木嘉壽・小松行高ら5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940～1941)を創刊。その第1号(1940)に《空》を発表する。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 齋藤 博 (さいとう・ひろし)

1938年8月5日、青森県立木造中学校(現・県立木造高等学校)において、日本エッチング研究所主催、講師西田武雄によるエッチング講習会が開催された。齋藤は北郡五所川原小学校に勤務しており、この講習会に参加したが、作品は確認されていない。【文献】高谷佐武郎「避寒の地に西田先生を迎えて」『エッチング』70(1938.8)(加治)

#### 齋藤二虫 (さいとう・ふたむし)

新潟で発行された文芸・美術などの芸術同人誌『土塊』創刊号(1927.12)に《習作》、第2号(1928.1)に《製飾図案》、第3号(1928.3)に《センダンの実》、第4号(1928.5)に《もくれん》、第6号(1928.11)に《構想》、第7号(1929.1)に《新発田警察署》《年賀状》を発表。これら版画のほかに感想文「雑草観照」(第5・6号)と最終の第7号までの毎号に短歌を寄稿している。【文献】『佐藤哲三の時代』展図録(新潟県立万代島美術館編「佐藤哲三の時代」展実行委員会 2008)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 齋藤芳葉 (さいとう・ほうよう)

1921(大正10)年頃に木版画集『地平線』を刊行。『みづ糸』第195号(1921.5)の紹介欄では、「齋藤芳葉氏の第一版画集である。日本紙に刷られた自作木版十五葉が納められている。白と黒との諧調の充分に出来てゐないものには繁雑な小細工の技巧が失敗を招いてゐるが簡潔な小細工のなされていないものには面白い作がある。後者の例として表紙の静物及姉弟、死の悩み、子供、等があり前者の例として風景、黄昏の橋下、沼畔、夏の家等がある。」との作評を掲載している。【文献】『みづ糸』195(1921.5)(樋口)

#### 齋藤無沙史 (さいとう・むさし)

1932(昭和7)年松田昇太郎・大村喜昭と「好刻会版画展」(2.13～日本橋・白木屋)を開催。1940年には赤坂治郎・富士原房・榎岡良と「木津津木会」を結成し、創作版画集『きつゝき』を創刊。第1号(1940.3 20部限定)の編輯を担当し、木版画《表紙》《石焼き芋屋》《角兵衛》《思出の新川》を発表した。当時、東京市京橋霊岸島1-16-4に住む。続く第2輯(1940.7)にも《夏祭りの団七》《音》《京名物 なり平寿し》を発表したが、第3輯以降の刊行は確認されていない。【文献】『版画 CLUB』4-3(1932.4)／『きつゝき』1(1940.3)／『創作版画誌の系譜』(三木)

#### 齋藤 譲 (さいとう・ゆずる)

大分の武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画誌『彫りと摺り』第2号(1931)に《百日草》を発表。これについて「寄宿舎の庭園に咲き誇ってゐた百日草の一輪を取って彫って見ました。誠に拙い作です。」と語っている。当時大分師範学校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 齋藤与里 (さいとう・より) 1885～1959

1885(明治18)年9月7日埼玉県北埼玉郡樋渡川村に生まれる。本名は与里治。私立埼玉中学校に学ぶも、1904年中退。翌年京都の鹿子木孟郎の主宰する室町画塾に入り、また聖護院洋画研究所に学ぶ。1906年師の鹿子木に同行し、パリへ留学。アカデミー・ジュリアンでジャン・ポール・ローランスに学ぶも、1907年のサロン・ドートンヌで見たセザンヌの大回顧展に感銘を受け、次第に後期印象派にひかれる。1908年帰国し、西欧絵画の新しい動きを紹介。1912年高村光太郎・岸田劉生らと「ヒュウザン会」を結成し、同年第1回展、翌1913年第2回展(フェウザン会と改める)を開催したが、若手作家による反官展的な動きとして注目された。この第2回展については、坂井犀水の展評があり、「終に齋藤与里氏自刻の木版画は甚だ愛すべきもので、氏の「坊やと独楽とワン公」の如き大作よりも却て遙かに多く氏の趣味の一端を密告して居た様に思ひつゝ余は会場を出て歸路に就いた」(雪堂「春陽の緒展覧会」『美術新報』12-7 1913.5)と記されていることから、出品作品19点の内に自刻の木版画が含まれていたことが判明する。また、この頃の版画としては、自刻・他刻が混在しているとしても、『早稲田文学』第98号(1913.1)の表紙(凸版)・扉《MESAME》(木版)、第100号(1913.3)の木版画による挿画《小春日》《曲芸》《黄昏の森》《落日》《恐怖》《噴火》《孤児》《郊外の春》《[失題]》、1913年11月16日付の『大阪朝日新聞』の「日曜附録」の特集記事「版画展覧会」に図版が掲載された木版画《老婆の顔》などが知られる。なお、この「日曜附録」には、「木版画」と題した論文も掲載され、「木版画の価値は趣味一点張りだ。其れ以外には何も無い。ムンクやロートレックの或る物は趣味から少し踏み出して居るが其の代り木版の役目は影を消して居る。日本の新聞雑誌に挿入されてある所謂木版画の殆ど凡ては趣味に迄も達してゐないが其の代わり木版の効果も綺麗に亡びてゐる。而して遂に木版画は趣味一点の上のみに其の存在を認める事が出来るのである」(引用は『現代の洋画』23による)などと、否定的に版画を論じており、版画制作はこの時期のみだったようである。1915年から国の主催する展覧会に出品し、同年の第9回文展に油彩画《朝》が初入選。翌1916年の第10回文展で《収穫》が特選、続いて1918年の第12回展、1919年の第1回帝展と入選を重ねたが、この展覧会を最後に一時官展から離れ、1923年春陽会客員、1924年から会員となるも、出品は1925年の第3回展のみで、1926年に退会した。その間、1919年大正日日新聞の学芸部次長格として招かれ、大阪へ移住するも翌年退社。1924年には牧野虎雄らと美術団体「槐樹社」を結成。機関紙『美術新論』を創刊し、主幹となった。また、同年矢野橋村らと「大阪美術学校」を設立し、洋画部教授を務めている(1936年の上京頃までか、1944年廃校)。1927年からは再び官展に復帰し、同年の第8回帝展で《水郷の夏》が特選を受賞。翌年の9回展から無鑑査となり、1957年の第13回日展までそのほとんどに出品。1934年の第15回帝展を最初に、新文展、戦後の日展でもたびたび審査員を務めるなど官展系の作家として活躍

した。また、1931年に槐樹社を解散し、翌1932年に新たに「東光会」を結成したが、1933年の第1回展から亡くなる直前の1959年4月の第25回展まで連続して出品し、同会会頭として後進の指導にもあたった。1959(昭和34)年5月3日東京都豊島区の自宅で逝去。東光会葬が行われ、同年の第2回新日展、翌1960年の第26回東光展に遺作が陳列された。【文献】『美術新報』12-7(1913.5)／『現代の洋画』23(1914.2)／『近代洋画の旗手斎藤与里とその時代』展図録(埼玉県立近代美術館 1990)／寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(東京国立文化財研究所 2005)／『浅井忠と関西美術院』展図録(府中市美術館・京都市美術館 2006)(三木)

齋藤和三郎(さいとう・わさぶろう)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)在学中、同校生徒が発行していた版画誌『刀』第2輯(1928)に《小鳥》、第3輯(1928)に《街道風景》、第4輯(1929)に《風景》を出品。1929年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

佐伯正一(さえき・しょういち)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)4年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928~1932)を再刊しようと鈴木嘉壽・小松行高ら5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940~1941)を創刊する。それに参加し、第1号(1940)に《ねずみ》、第2号(1940.10)に《そてつ》、第3号(1941)に《百日草》を、5年生に進級後の第4号(1941)に《すみれ》、第5号(1941)に《山》を発表。その後、佐伯らの卒業と共に『刀 再版』の刊行は途絶えてしまう。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

佐伯義人(さえき・よしと)

1932年8月、日本水彩画会は上野の東京美術学校において夏期講習会を主催。その参加者を対象に、西田武雄主宰の日本エッチング研究所は、夜間エッチング講習会を無料で開催した(『エッチング』1号1933.1)。佐伯はその講習会(参加者14名)に参加し、エッチング技術を習得。その翌年、研究所機関誌『エッチング』第6号(1933.4)にエッチング作品を発表する。当時、熊本県下益城郡杉合東部尋常小学校に教師として勤務しており、夏休みを利用して講習会に参加したようである。【文献】『エッチング』1・6(加治)

佐伯留守夫(さえき・るすお) 1912~1986

1912年(明治45)4月14日、宇都宮市に生まれる。1926年宇都宮中学校に入学し、美術クラブ「パレット会」に所属、中学校時代に市内で木彫作品による個展を開催する一方、英語教師であり創作版画

家であった川上澄生が顧問的立場で刊行した版画同人誌『刀』の創刊に同人として参加。5号から編集を担当し、卒業する10号まで継続して木版画を寄せた。1931年東京美術学校彫刻科木彫部に入学、交友会版画部に入った。1932年小野忠重を中心とした「新版画集団」の結成に参加。機関誌である版画誌『新版画』1号(6月)に《自画像》を、第6号(11月)に《足尾への峠より男体・中禅寺湖を望む》を発表、また10月開催の集団第1回展に《初夏》など版画全7点を出品した。こうした集団の活動の一方で、美校内で交友会版画部の展覧会や現代創作版画展を開催した。1933年『新版画』7号(1月)に木版画《アトランテイド》を発表、第9号(6月)の表紙を担当した。また3月開催の集団第2回展に《柵のある風景》など全4点を出品した。1936年東京美術学校研究科に入学。1937年下野新聞社で鈴木賢治との二人展を開催し木彫など28点を出品。またこの年第1回新文展に木彫が初入選した。1938年美校を卒業し臨時招集により入隊。1940年に一旦解除されるが1941年に再入隊した。1946年復員し、彫刻制作を再開する。以後1960年代半ばまでは日展に木彫作品を出品、それ以後は宇都宮市を拠点に作品を発表した。また1958年以降は宇都宮市や鹿沼市などの学校の少年少女をモデルとした多くの立像を設置した。1986(昭和61)年逝去。【文献】『彫刻のちから 佐伯留守夫・斎藤誠治・篠崎明雄 宇都宮が生んだ彫刻家三人展図録』(宇都宮美術館 2013)(滝沢)

三枝古都(さえぐさ・こと)

本名、三枝こと子。履歴は不明だが、女子大を卒業、染色を学ぶ。1923年山本鼎が主宰した農民美術研究所の乙種研究生(副業的工芸指導者に必要な技術と知識の習得を目ざし、3年間、研究所が生活費を負担する)に橋詰貢(飯山の漆工学校出身)、遠山ゆき子(神奈川農美生産組合員)とともに選ばれる。『農民美術』第3巻第4号(1926.9)に〔木版〕蔵書票が掲載されている。【文献】小崎軍司『山本鼎・倉田白羊』(上田小県資料刊行会 1967)／『山本鼎生誕120年展』図録(上田山本鼎記念館 2002)(樋口)

酒井 晃(さかい・あきら)

1928年10月、アトリエ社主催第15回誌上展覧会(山本鼎選)で木版画《静物》が佳作入選。1928年当時静岡県在住。【文献】『アトリエ』5-10(1928.10)(樋口)

阪井紅兒(さかい・こうじ) 1869~1945

「阪井紅兒」名で、川柳雑誌『五月鯉』第1巻第1号(1905)に木版表紙絵《五月幟》、第1巻第4号(1905)に表紙絵(平版)を制作。また小杉未醒・正宗得三郎・森田恒友らの漫画をおさめた『漫画百趣』(日高有倫堂 1910)に《鶏合》を描くほか、幸田露伴著『潮待ち草』(東亜堂書房 1907)、『頼朝』(東亜堂書房 1908)などの装画や口絵なども描いている。なお「阪井紅兒」は阪井久良伎(本名弁(わかち))と同一人と思われ、阪井久良伎は、1869(明治2)年3月6日神奈川県久良岐郡野毛(現在の横浜市中区野毛)に生まれる。1904年久良岐社を設立、川

柳雑誌『五月鯉』を創刊。川柳作家として井上剣花坊とともに川柳革新運動にかかわった。1945（昭和20）年4月3日逝去。【文献】『日本の版画 1900 - 1910 版のかたち百相』展図録（千葉市美術館 1997）／『阪井久良伎』（ウィキペディア 2014.9.4）（樋口）

坂井盛三郎（さかい・せいざぶろう）

1932（昭和7）年5月の第3回京都工芸美術展覧会に木版画《静物》を出品。【文献】『第三回京都工芸美術展覧会出品目録』（1932）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）（三木）

坂井正義（さかい・まさよし）

1935（昭和10）年東京美術学校油画科予科に入学。在学中の1938年に第7回日本版画協会展にエッチング《逆行人物》を出品。恩地孝四郎は、「習作程度であつて、まだエッチングとしてはやつてゐるといふ程度であるが、やはり下地は調つてゐる。エッチングへの乗入れにも一つ気を入れてほしい所」（『版展のエッチング』『エッチング』74）と評している。1940年東京美術学校油画科を卒業した。【文献】『第七回版画展目録』（日本版画協会 1938）／『エッチング』74（1938.12）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』（ぎょうせい 1997）（三木）

坂上登（さかがみ・のぼる）⇒北岡文雄（きたおか・ふみお）

榊原一廣（さかきばら・かずひろ）1883～1941

1883（明治16）年12月10日三重県鈴鹿郡龜山町に生まれる。1889年から1902年まで三重県第一中学校に学ぶ。1904年京都の聖護院洋画研究所に入り、浅井忠に師事。また、1906年の関西美術院創設にともない、同院に移り、引き続き浅井の指導を受ける。1907年三越呉服店に入社し、店内装飾・図案を手掛けたが、1909年に飯田呉服店（現・高島屋）に移り、その後図案部長を務めている。展覧会は1905年の関西美術会第4回展に初出品。以後、1910年まで同会の展覧会や競技会に出品し、1906年の第5回競技会水彩画部門と1908年の第7回競技会で二等賞、1909年の第8回競技会で三等賞を受賞したほか、1913年の第2回光風会展に油彩画《菜園》、1919年の第6回二科展に油彩画《静流》が入选した。1920年から1922年までヨーロッパに遊学。その間、1921年のサロン・ドートンヌ（パリ）に《カーニュ風景》（油彩画か）が入选している。帰国後の1923年に「滞仏記念洋画展覧会」（大阪・高島屋）を開催。また、大阪市美術協会の会員及び幹事となり、翌1924年の第1回展では審査員を務め、油彩画《ピリヤード》を出品。1934年の大札記念京都美術館美術展にも油彩画《干魚》を出品している。版画は、ガラス板に油絵具で絵を描き和紙に吸い取るモノタイプ版画を得意とし、1926年にモノタイプ版画による展覧会（10.11～16 大阪・三越）を開いている。この展覧会については、『中央美術』第12巻第11号（1926.11）の「美術界消息」に「創

作モノタイプ六十点（滞欧中の作多し）」との記事があり、滞欧中からモノタイプ版画を試みていたように紹介されているが、帰国から4年後の発表であり、技法の習得時期については保留しておく。このモノタイプによる版画展は、1927年（3.22～25 神戸・三越 近作50点）、1933年（3.25～28・12.16～19 神戸・画廊）、1934年（12.16～19 大阪・大阪画廊）にも開催したことが確認できるが、今後さらに増えるかもしれない。1941（昭和16）年2月23日兵庫県伊丹（一説には三重県津）の自宅で逝去。【文献】『榊原一廣とその周辺展』図録（三重県立美術館 1990）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『浅井忠と関西美術院』展図録（府中市美術館・京都市美術館 2006）／『中央美術』12 - 11（1926.11）・13 - 4（1927.4）／『ユーモラス・コーベ』13・14（1933.2・3）／『ユーモラス・ガロー』22（1933.11）（三木）

榊原紫峰（さかきばら・しほう）1887～1971

1887（明治20）年8月8日、友禅染織職人の父榊原蘆江（敬吉郎）の二男として京都に生まれる。本名安造。紫峰と号す。兄春之助（佳山のちに雨村）・弟秀次（苔山）・次弟捨三（始更）・末弟弘はいずれも日本画家となる。1903年京都市立美術工芸学校入学。同級に後に国画創作協会の同志となる村上華岳がいた。1907年同校を卒業、研究科に進み入江波光と同級となる。この頃父蘆江の命名で「紫峰正勝」と号す。1909年兄雨村・村上華岳・入江波光らと京都市立絵画専門学校本科2年に編入され、1911年卒業制作《花ぐもり》が第5回文展で3等賞となる。1913年同校研究科卒業。その後は1915年第2回再興日本美術院展に前年文展落選作の《秋草》を出品した以外は1917年第11回まで文展に出品する。この間土田麦僊、小野竹喬らとも親交を深め、1918年文展を離れて国画創作協会の結成に参加する。以後、1928年第7回まで国展に出品を続け、国画創作協会第一部（日本画）解散後は青年画家たちが結成した新樹社展に賛助出品するも、新樹社は2回展を以って解散となり、その後は画壇から離れて制作を続けた。1937年京都市立絵画専門学校教授に就任。1950年からは京都市立美術大学教授として後進の育成にあたる。生涯を通じて花や鳥獸類を好み、花鳥画家として知られた。1971（昭和46）年1月7日京都で逝去。版画は、木版画集『[花鳥]十二ヶ月』（12枚 各39×50cm 秋保鉄太郎版元 1942）の制作がある。【文献】田中日佐夫『日本画 繚乱の季節』（美術公論社 1983）／『国画創作協会の全貌』（光村書院 1996）／『版画堂』目録96（2012.6）（樋口）

榊原優一（さかきばら・ゆういち）

1928年10月、アトリエ社主催第15回誌上展覧会（山本鼎選）で木版画《自画》が二等入選。1928年当時愛知県碧海郡大濱小学校に勤務。【文献】『アトリエ』5 - 10（1928.10）（樋口）

榊原嘉雄（さかきばら・よしお）

愛知県半田の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第5号（1931）に木版による作品を発表。現在『運』は5～7・10号（1931～1935）の4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

坂口右左視（さかぐち・うさみ）1895～1937

1895（明治28）年佐賀県唐津に生まれる。1914年京都の関西美術院に入り、のち東京の日本美術院研究所に学び小杉放菴らの指導を受ける。1917年第4回二科展に油彩画《目覚め行く比叡》、翌1918年第5回院展洋画部に《雲影の湖水》が入選。1922年に小杉らが「春陽会」を結成してからは同展に出品するようになり、1923年の第1回展に《風景》《春日》を出品し、春陽会賞受賞。以後、1934年の第12回展を最後に退会するまで、連続して出品。その間、1925年の第3回展で再び春陽会賞受賞。無鑑査に推挙され、1931年には会友となった。版画は、1927年に平塚運一を中心に集まった創作版画誌『版』（編集者・前田政雄 全8冊か）に参加し、創刊号（1927.12）に木版画《おどり》、第2号（1928.1）に《勅題》、第3号（1928.3）に《顔》、第4号（1928.7）に《太陽に狂へる男》、第6号（1928.12）に《蔵書票》、第7号（1929.2）に《年賀状》を発表。また、1928年の第8回日本創作版画協会展に木版画《化粧》《松丘》、1929年の第9回展に木版画《初春》を出品している。1937（昭和12）年1月6日結核のため逝去。なお、『日本美術年鑑』昭和13年版は、「物故作家及美術関係者」でその経歴を紹介するとともに、「其の画風は要約された筆触を用ひて気魄ある表現を示し、非凡な才能を示したが、多く世に容れられず、不遇であつた」と評している。【文献】『日本美術年鑑』昭和13年版（美術研究所 1938）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『浅井忠と関西美術院』展図録（府中市美術館・京都市美術館 2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

坂口延治（さかぐち・えんじ）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に《無我 習作》を発表。現在『西日本新版画』は1-2-2-1,2-2,3-2の4冊を確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

坂口露光（さかぐち・ろこう）

『みづゑ』第218号（1923.4）の新刊紹介〔欄〕には、『スケッチ版画雑誌』第16号が刊行され、「健全な発達をしてきた同誌は今第十六号を発行するに到つた。坂口氏の努力を多とする、印刷にも進歩の跡が見える、益々盛んになることを望んで置く、（長野県大町坂口露光方、会員制度）」と坂口露光の名前を伝えるが、坂口露光について詳細は不明。また『スケッチ版画雑誌』という名称の版画雑誌も未見。【文献】『みづゑ』218（1923.4）（樋口）

坂田市郎（さかた・いちろう）

生没年不詳。1925年10月発行の萩原恭次郎詩集『死刑宣告』（長隆舎書店）に2点の抽象的作風のリノカットを挿入。作品の発表はそれ以外確認ができない。『マヴォ』誌にも掲載がなく、大正期新興美術運動期の展覧会にも出品はない。【文献】滝沢恭司「大正期新興美術と文学の交流—運動を考察する一視点」『近代日本版画の諸相』（中央公論美術出版 1998）（滝沢）

阪田吉郎（さかた・きちろう）

阪田は一般大衆に認識の薄い版画への理解とその普及を意図して、1935年に「西日本新版画制作普及協会」を創設。その機関誌として趣味の版画研究誌『西日本新版画』を編集・発行する。その第1年2輯（1936.10）に《モデルの休憩》、第2年1輯（1937.3）に《画壇巡礼》、第2年2輯（1937.7）に短歌、第3年2輯（1938.7）に《顔のいろいろ》《来客》表紙《水仙》と詩を発表。第2年1輯の《画壇巡礼》では、古いスケッチや記憶をたよりに、当時活躍していた画家（牧野虎雄・中村大郎・鍋木清方・中村研一）の肖像を版画にしている。また、絵入歌集として『草人』を上梓。「自画自刀のくだらない版画と母が在世当時常時の詠草数十首を集めて、この草人を公にすることにした。」（『草人』序）として版画25枚を挿入している。このほか、民衆芸術叢書第2篇『摩耶画集』（一書堂出版部 1935）や歌集『空洞』を出版。なお、広告記事により『吉郎版画集』『画壇巡礼』の刊行を予告しているが、未確認。当時、兵庫県武庫郡精道村芦屋局管内翠ヶ丘に在住。現在、『西日本新版画』は上記4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

阪田耕雪（さかた・こうせつ）1871～1935

1871（明治4）年1月6日金沢市に生まれる。本名萬之助（萬助説もあり）。尾形月耕に学ぶ。異画会会員。1900年発行の菊池幽芳著『己が罪』（中巻・春陽堂）の口絵（木版多色）など、口絵・挿絵の画家として知られる。その後、拠点を大阪に移し、1910年には岡本霊華著『怪傑紀文伝』（前・後編、嵩山房）の口絵を担当。1914年第8回文展に《露》が入選。『大阪毎日新聞』の専属挿絵画家など、主に関西の美術界で活動し、山水・人物風俗画などを描く。1935（昭和10）年2月6日逝去。享年64。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

阪田咲子（さかた・さきこ）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に《妹背山》、第2年1輯（1937.3）に《牡丹雪》、第2年2輯（1937.7）に《さんぼう（静物其2）》、第3年2輯（1938.7）に《ダイビング（プールにて）》と短歌を発表。現在『西日本新版画』は上記4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

阪田武子（さかた・たけこ）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に

《八百屋お七》、第2年1輯(1937.3)に《宵》、第2年2輯(1937.7)に《工業地帯(其2)》、第3年2輯(1938.7)に《溪流(秋の巻)》を発表。現在『西日本新版画』は上記4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 坂田路春(さかた・みちはる)

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第1年2輯(1936.10)に《水上制覇を目指して》、第2年1輯(1937.3)に《馬車》、第3年2輯(1938.7)に《競馬場所見》を発表。現在『西日本新版画』は1-2,2-1,2-2,3-2の4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 坂原穎夫(さかはら・ひでお)

1931(昭和6)年の春陽会第9回展に版画《梅花》(木版画か)を出品。【文献】『春陽会第九回展覧会目録』(1931)(三木)

#### 坂巻耕漁(さかまき・こうぎょ) 1869～1927

1869(明治2)年2月10日東京日本橋馬喰町に生まれる。父羽生善兵衛、母泰(たい)の次男で名は弁之助。はじめ宮林林谷という画家に絵の手ほどきを受ける。小学校卒業とともに陶器絵付け職人の叔父の許で修業に入った。12歳の1881年に母泰が月岡(大蘇)芳年と再婚。以来「月岡」姓となる。しかし母方の姓「坂巻」を使用することが多い。東京府画学伝習所で結城正明に学ぶ。また、義父芳年に就き「年久」の号を受ける。さらに尾形月耕門に入り「耕漁」の号、松本楓湖にも学び「湖畔」の号を受けた。一時、福島県窯業徒弟学校、会津本郷村実業学校図画の教師を務めたこともあった。日本画家として日本美術協会展、日本画会展に出品。『風俗画報』で能の舞姿を描いた謡曲能楽演舞図を連載し人気を得ると共に、版元大黒屋松木平吉からの能演舞版画(能版画)を創出して、1897年～1900年発行の横大判錦絵『能楽図絵』全250図(画面右上脇解説付)。1921年～1925年にかけて(関東大震災時の困難をはさんで)発行の豎大判錦絵『能楽百番』全101図一この時の住所が「下谷区谷中坂町七九番地」である。その他、横中判錦絵のシリーズ等が知られる。ちなみに近年では海外からの人気を得ている。1927(昭和2)年2月25日逝去。【文献】『近代の能画家 月岡耕漁』展図録(城西国際大学水田美術館 2005.9)(岩切)

#### 坂本貫一(さかもと・かんいち)

群馬県に生まれる。1924年頃に太平洋画会研究所で洋画を学び、台北の高等学校や大学の博物標本画を描くなどの仕事につく。1934年末、西田武雄主宰の日本エッチング研究所からエッチングプレス機を購入し、エッチング制作を始める(『エッチング』32 1935.6)。その翌年、台湾の風俗、行事、風景などを題材としたエッチング作品12枚を同研究所機関誌『エッチング』の編集部に送り、そのうちの2枚《富田町郊外(台北)》《街頭小景(台北)》が『エッチング』第32号(1935.6)に、第38号(1935.12)には《耕作》が掲載されている。第48号(1936.10)には小

文「感じたこと」と題して、銅版画家今純三への版画家として人間としての憧憬を寄稿している。また、ソフトグラウンド亜鉛版《台湾石碇風景》を第60号(1937.10)に発表し、「ソフトグラウンドを試みて(その失策など)」の小文も寄稿。その後、日本エッチング作家協会主催「第1回日本エッチング展覧会」(資生堂ギャラリー、1940.12.10～13)に《台湾風景》を、「第2回日本エッチング展覧会」(資生堂ギャラリー、1941.5.15～18)に《肖像及スケッチ》を出品。当時、台湾台北市に在住(『エッチング』60 1937.10)。戦後は、博物標本画を描く仕事柄か、寺尾新著『小さな水産学者』(妙義出版社 1949)の装丁と挿絵を担当。そのほか児童向けに『たのしい動物園』や『魚貝の図鑑』など絵本や図鑑の挿絵にも携わった。【文献】『エッチング』32・38・48・60(加治)

#### 坂本 正(さかもと・ただし)

西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第15号(1934.1)にエッチングを発表。この作品について西田は「坂本君の図案の模写も、誰もが一度はやって見ることをおすすめします。」と作品評にコメントしている。当時京都に在住。【文献】『エッチング』(加治)

#### 坂本 力(さかもと・つとむ) 生年不詳(1914?)～1935

島根県松江市に生まれる。16歳の春、洋画家を志し上京。西田武雄主宰の日本エッチング研究所の研究生となり、エッチングを学び制作を始める。写実力をつけるために静物写生からはじめて、水彩画、油絵へと研究を進め5年ほど静物ばかりを描き続けた。研究所の機関誌『エッチング』の第2,7,9～14号(1932～1933)には壺やおもちゃなどを題材にしたエッチングが掲載されている。また、西田は坂本をエッチャーとして評価する一方で、日本で最初の優秀なプリンターとしても期待していた(『エッチング』44 1936.6)。しかし、1935年の春、兵役検査のために郷里へ帰省。その後、罹病し、その1935(昭和10)年に逝去。享年21歳であった(『エッチング』32 1935.6)。没後の1941年に開催された日本エッチング作家協会主催「第2回日本エッチング展覧会」(資生堂ギャラリー 1941.5.15～18)に《西欧巨匠肖像》が遺作展示された。【文献】西田武雄「坂本力君」『エッチング』29(1935.3)／『エッチング』2・7・9・32・44(加治)

#### 坂本俊三(さかもと・としぞう)

版本会発行の創作版画集『版』第5輯(1937.5)、第7輯(1937.7)、第10輯(1937.10)、第11輯(1937.12)、第12輯(1938.1)に木版画各1点を発表。版本会は同誌に掲載されている校章や作品の題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。【文献】『版』5・7・10・11・12(加治)

#### 坂本俊三(さかもと・としぞう)

武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第24号(1941.12)の会員名簿には名前があるものの、坂本の版画作品は掲載されていない。当時、宮崎県宮崎

市橋通 5-9 に在住。【文献】『九州版画』24 (加治)

坂本直行 (さかもと・なおゆき) 1906 ~ 1982

1906 (明治 39) 年 7 月 26 日、北海道釧路に生まれる。祖父は坂本龍馬の甥。後に龍馬の長兄権平の養子となり、郷土坂本家 8 代目当主となる。通称「ちよっこう」で知られる。母方の祖父が亡くなり、農場の管理、処分のために 1914 年に一家で札幌に転居。1919 年札幌二中 (現・札幌西高) に入学し、この頃から山でスケッチをはじめ。1924 年北海道帝国大学農学部に入。山岳部のメンバーとして活動する。1927 年卒業後、1930 年には牧場経営者の北大先輩に誘われ、十勝支庁広尾郡に転居。1936 年土地を取得し、原野の開墾を始める。この頃、北海道山岳界の草分けとして、多くの登山に参加。また北海道の自然をモチーフとして風景画や植物画を手掛けるようになり、山岳画家としての活動も行っている。1957 年に札幌市で開いた第 1 回個展の成功を受けて、1959 年には東京でも個展を開催。以降画業に専念し、札幌市にアトリエを構える。水彩画・油絵などを制作し、画題を求めて世界各地を旅する。1961 年には坂本がデザインした花柄の包装紙が帯広千秋庵 (現・六花亭) の包装紙として採用される。1974 年北海道文化賞受賞。1982 (昭和 57) 年 5 月 2 日に札幌市において膀胱癌のため逝去。1992 年六花亭製菓は北海道河西郡中札内村に坂本直行記念館を開設。著書に『開墾の記』(長崎書店 1942) や『山・原野・牧場』(竹村書房 1939) がある。

版画制作については、在学中に北大生を中心として発行された詩・版画・演劇の芸術同人誌『さとぼろ』第 1 巻 6 号 (1925.11) に木版画《静物》《石狩風景》を発表。同時期に開催された北海道で最初の創作版画展覧会「第 1 回版画展覧会」(主催：札幌詩学協会 1925 年 10 月 25 ~ 27 日 会場：札幌商業会議所) にも《石狩風景》(同題名 3 点) 《牧場》《石狩川》《千歳川風景》《大雪山姿見の池》《軽川風景》《静物》《馬車》《湖水》の 11 点を出品した。【文献】「年譜」『坂本直行作品集』(京都書院 1987) / 「北海道の初期版画」(今田敬一編著『北海道美術史』(北海道立美術館 1970) / 『創作版画誌の系譜』/ ウィキペディア (加治)

坂本繁二郎 (さかもと・はんじろう) 1882 ~ 1969

1882 (明治 15) 年 3 月 2 日久留米市に生まれる。1891 年久留米高等小学校に入学、青木繁と同級となり、同校の図画教師で洋画家の森三美に絵画の手ほどきを受ける。1895 年同校卒業。1900 年森三美の後任として母校久留米高等小学校の図画代用教員となる。1902 年帰省中の青木繁と再会し、画家になることを決意して青木と共に上京、小山正太郎の不同舎に学ぶ。1904 年より太平洋画会研究所に通う。1907 年第 1 回文展に《北茂安村の一部》が入選。以後第 7 回展 (1913) まで出品。青木を通じて山本鼎、森田恒友らを知り、1908 年山本鼎の紹介で北沢楽天の「東京パックス社」に就職する。石井鶴三、山本鼎、川端昇太郎 (龍子) らと机を並べながら 3 年間同誌に風刺漫画を描く。1914 年二科会創立に参加。山本鼎らの勧めで 1921 年渡仏。1924 年帰国後は郷里の

久留米に居を定め、1931 年八女郡福島町 (現・八女市) に転居。八女近郊の画家や美術愛好家からなる「新人会」を指導しながら、作品は主に二科会に発表。1944 年二科会の解散以後はいずれの団体にも所属せず、久我五千男の「草人社」展や座右宝刊行会社主・後藤真太郎が主宰する「清光会」展 (1933 年に創立した美術小団体で、安井曾太郎・梅原龍三郎・小林古径・安田鞆彦など著名な画家を同人として 1954 年まで 19 回の展覧会を開く) に作品を発表する。1954 年八女名誉市民。1956 年文化勲章受章。1969 (昭和 44) 年 7 月 14 日八女市で逝去した。

版画の制作については坂本暁彦編『坂本繁二郎全版画集』(形象社 1980) に詳しい。高等小学校時代に森三美より石版画の手ほどきを受け、『方寸』同人として第 1 巻第 2 号 (1907.6) から第 5 巻第 3 号終刊 (1911.7) まで『方寸画曆』明治 43 年度版 (方寸社 1909.12) にジंक版と木版 (或は併用) の作品を制作。東京パックス時代 (1908 ~ 1911) は 140 点にのぼる風刺漫画を描き、『美術週報』第 1 巻第 8 号 (1913.11) に「版画に就きて」を寄稿。小川芋銭の「木版画で新しい試みをしたら面白い」という言葉を受けて石倉重継・堀越貫一・小林正之助の 3 名が設立した日本版画会の機関誌『ココロミ』(1913.12 1 号のみ確認) に会員として名を連ね、版画の制作はないが「昔と今の木版画」と題する小文を寄稿する。坂本の版画は彫師摺師による木版画がほとんどで、山本鼎に誘われて競作した木版画集『草画 舞台姿』第 1 集 ~ 第 3 集 (発行人山本鼎、彫版井口実、摺藤波銀蔵 発行所東京版画倶楽部) は、1911 年に落成した帝国劇場の狂言から出演俳優の似顔絵を山本鼎と二人で 2 図ずつ計 4 図を 1 集として出版。予想を超える好評で第 3 集まで刊行されたが、同年 7 月、山本鼎の渡欧で中止となった。同版画集は、1971 年加藤版画研究所より坂本繁二郎の版画 6 図のみを収めた復刻版が『舞台姿』と題して刊行されている。次に 1918 年に中島重太郎の「日本風景版画会」が発行した坂本と親しい石井柏亭・石井鶴三・森田恒友・平福百穂・小杉未醒と坂本の 6 名による全 10 輯からなる連刊版画集『日本風景版画』に坂本は第 6 輯『筑紫之部』(5 図) を担当し、坂本の代表的木版画集となった。こちらも 1970 年加藤版画研究所より復刻版が刊行されている。戦後は大判の木版画集『阿蘇五景』(草人社 全 5 図 限定 300 部 加藤版画研究所彫摺 1950) の刊行があり、後年『坂本繁二郎画集』(求龍堂 1962) の附録として縮小版が数種刊行された (1962 年版・1964 年版・1971 年版)。翌 1951 年には木版画集『馬三題』(美雲木版画社 初版限 300 部 木版 3 図) を刊行。その他には美術雑誌『芸美』第 1 年第 4 号 (三笠美術店 1914.9) に木版口絵《剥ぎずてられし海雀の皮》、中里介山『大菩薩峠』第 4 冊木版口絵《お絹》(春秋社 1921)、文化勲章受章記念の《泊船曙光》(加藤版画研究所 1956)、『馬』(加藤版画研究所 1967) などがある。木版画以外では、石版画《建設中の立教大学》(1919) や本格的に馬の姿態を描き始めた 1931 年に制作したエッチング《雨中馬》《母仔馬》(試刷りのみ) が知られているが、制作の経緯などは不明。【文献】坂本暁彦編『坂本繁二郎全版画集』(形象社 1980)

／『特集展示 坂本繁二郎の版画』展図録（石橋美術館 1994.2.8～3.6）／『石橋美術館会館 50 周年記念 坂本繁二郎展』図録（石橋美術館・ブリヂストン美術館 2006）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

#### 坂本正春（さかもと・まさはる）

石井柏亭が指導する文学院専修科では、1933 年 4 月から肖像画、挿画、図案などに加えて石版、エッチングの講義を行うこととなり、1933 年 10 月 2 日から 7 日まで西田武雄によるエッチング講習会が開催された（日本エッチング研究所としては第 1 回目の講習会にあたる）。この講習会に谷口富美枝、堀忠義ら専修科生 16 名の内の一人として坂本正春も名を連ね、『エッチング』第 12 号（1933.10）にその時に制作したエッチング《〔風景〕》が図版で紹介されている。その後の消息は不明で、5 年後の『エッチング』第 126 号（1943.7）に、日本版画奉公会新会員として坂本正春の名前を見つけるが、同一人かは未確認。当時の住所は世田谷区松原 3 - 805。【文献】『エッチング』12・126（樋口）

#### 坂本参雄（さかもと・みつお）

東京では詩人の関谷忠雄が主宰を担い、詩人たちが中心となって、詩と版画の同人誌『牧神』（牧神詩社）を発行した。同誌に発表されている坂本自身の作品は、詩などの文学作品が多いものの、版画作品も掲載されている。その第 2 号（1930.2）に《柳》、第 4 号（1930.7）に《売笑婦》と詩、第 5 号（1930.8）に《小品》3 点と詩を発表。第 2 巻第 6～8 号（1930.9～11）には詩と小文を寄稿している。当時、東京市外千駄ヶ谷町 549 の関谷宅に在住（『牧神』5）。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 坂本 有（さかもと・ゆう）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校（現・県立宇都宮高等学校）に在学中、長谷川勝四郎ら同校生徒が発行した版画誌『刀』（1928～1932）の創刊号から参加する。その第 1 輯（1928）に《支那人形》、第 2 輯（1928）に《木》、第 3 輯（1928）に《扇》、第 4 輯（1929）に《静物》を発表。1929 年に同校を卒業。上京し、関谷忠雄主宰の詩と版画の同人誌『牧神』の同人となり、第 4 号（1930.7）に《S の顔》を発表。その後、理由は不明ながら、帰郷している（『牧神』5 1930.8）。東京では神田区和泉町 1-8 に在住。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 坂本義信（さかもと・よしのぶ）1895～1988

1895（明治 28）年高知県高岡郡窪川町に生まれる。1917 年高知県師範学校卒業。7 年間の教員義務年限を終えて上京、太平洋洋画会研究所に入所し郷里の先輩石川寅治に師事。当時、石川は木版画も手掛けており、洋画とともに木版画の制作においても影響を受けたと思われる。その後帰郷し中学校図画教員を経て 1927 年佐川高等女学校に赴任。1929 年からは県立海南学校（現県立高知小津高校）に勤める傍ら、1932 年より高知各地を取材した木版画集『土佐三十

絵図』の制作を始め、1935 年に完成。同年、県公会堂で開催された高知出身の在京作家が集まって結成した土陽美術会展に出品して話題となり、当時の高知県知事・泊武治に賞賛され、同郷の明治の元勲田中光顕や永野修身海軍大臣らに買い上げられた。また戦後 1947 年には高知進駐の英国軍人ビール・コストル軍曹ら軍関係者が 20 数部求めて海を渡ったほか、同年アメリカでの万国美術観光ポスター展にも高知県代表作品として出品されたという。同版画集は戦前に 50 部、戦後に数十部刷られ、戦前と戦後では一部図柄が異なる。戦後のものは《山内神社参道》と《桂浜》に代わって《鏡川》と《八洲》が収められており、また《高知城》は戦前と戦後では構図が異なる。なお版画に関するその他の活動の記録としては、料治熊太主宰『版藝術 第 18 号 全国郷土玩具集』（1933.9）に木版画《坊さんと花かんざし》を発表。1934 年（海南中学教員時代）にはエッチングプレスを所有し、木版画だけでなくエッチングにも関心を寄せていたことがうかがえる。1961 年教員生活を退き、土陽美術会で監事などをつとめ、1988（昭和 63）年に逝去した。【文献】『エッチング』22／『絵画で巡る高知の旅 高知名所・名物観光めぐり展』図録（高知県立美術館 2006.11～2007.1）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

#### 佐川義高（さがわ よしたか）1902～1971

1902（明治 35）年茨城県に生まれる。1920（大正 9）年に同人誌『孔雀草』を創刊、1923 年に有島武郎から援助を受け、芸術倶楽部アパート内で「黒船社」を創立し、謄写印刷技術の研究と出版を始める。関東大震災により、黒船社の活動は短かったが、その後も製版、印刷の仕事が続けて、日本で謄写版を売り出した堀井謄写堂の宣伝用印刷物や佐藤兄弟商会が請け負った印刷物を手がけ、技術の粋を示した。戦後は草間京平の名前でさらなる技術開発、器材開発に取り組み、講習会・研究誌を通して普及につとめた。謄写版で創作版画を制作した若山八十氏に対して「複製派」と呼ばれ、技術者として敬意を集めたが、自身は、「（謄写版を）分解して中身を調べてみたくなったまでで、断じて技術者ではありません」と述べ、技術が新たな表現を導くかのような創造性あふれる研究を展開した。その「美術謄写印刷」と呼ばれる、印刷術と芸術の間に立ったその仕事が版画の創作に向かう作家を含め、広く刺激を与えたことは見逃せない。1971（昭和 46）年逝去。【文献】黒水武夫編『後塵録』（日本謄写美術協会 1947）／須永襄編『昭和堂月報の時代』（大日本印刷株式会社 ICC 本部 2000）／（株）昭和謄写堂内佐川義高を偲ぶ会編輯『佐川義高（草間京平）遺稿集』（佐川啓子発行 1973）／幅和弘『ショーワ 60 年史』（株式会社ショーワ 1988）／『草間京平伝』（里美村教育委員会 1999）／志村章子『ガリ版ものがたり』（大修館書店 2012）（植野）

#### 佐久間貞雄（さくま・さだお）

中学 4 年の時に、佐久間は美術学校に進もうと絵画部同級生 4 人で受験するが入学に失敗。中学卒業後、家業を継ぐ。父親の友人に曾我尾武治や中田幾

久治などのエッチャーがいたことからエッチングを始め、1935年からは西田武雄主宰の日本エッチング研究所で学び、同研究所機関誌『エッチング』第41号(1936.3)にエッチング《開墾地の小屋》を発表、「愚想」と題してエッチングをはじめた動機と「少ない時間をさいては野に山にスケッチにでかけ、プレートに向って針を動かす時に無上の慰安を感じる」と感想を述べている。【文献】『エッチング』41(加治)

桜井専夫(さくらい・あつお)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)5年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928~1932)を再刊しようと5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940~1941)を創刊。それに参加し、第1号(1940)に《祈り》を発表する。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

桜井竹夫(さくらい・たけお)

1931年、大分県師範学校の武藤完一は版画教育講習会の開催を契機に版画誌『彫りと摺り』(1931~1933)を創刊する。その第2号(1931.11)に《かたつむり》を発表。「平塚先生の版画を見せて戴いて自分もやってみようと思ひ立ちました。」と感想を寄せているが、その後の作品は確認されていない。当時、大分県師範学校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』(2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

笹川春雄(ささかわ・はるお) → 長坂春雄(ながさか・はるお)

佐々木 理(ささき・おさむ)

豊橋エッチング協会会員。1936年8月28・29日の両日、豊橋中学校において開催の西田武雄を招いたエッチング講習会に参加。豊橋エッチング協会例会などにも参加する。当時、豊橋市の中学教員と知られる。【文献】『エッチング』47・48(樋口)

佐々木三郎(ささき・さぶろう)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森、北陸などを回ったが、7月30・31日の2日間は北海道空知郡岩見沢中央小学校でエッチング・木版画・素描の講習会(講師:西田武雄・武藤完一・小野忠重など)を開催。当時、北海道上砂川小学校の教員であった佐々木も参加し、その時の作品とみられるエッチングが研究所機関誌『エッチング』第70号(1938.8)に掲載されている。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70(1938.8)(加治)

佐々木 孔(ささき・たかし) 1934~1974

1907(明治40)年7月14日宮城県栗原郡に生まれる。1929年東京美術学校西洋画科に入学。在学中、1933年の第20回二科展に油彩画《黄色い花とマシン》、翌年の21回展にも《朝顔》が入選。1934年同校卒業。1936年に美校の臨時版画研究室(のちの

臨時版画教室)の教務嘱託となり助手を勤めた(1944年まで)。その年、国画会第11回展に版画《奈良風景》を出品、以降12回展(1937)、14回展(1939)に出品した。また、1937年日本版画協会第6回展に銅版画《風景》《編物する女》を出品し、以降10回展(1941)まで銅版画を中心に連続出品した。1939年の第8回展で会員に推挙される。1940年資生堂ギャラリーで開催した日本エッチング作家協会の第1回エッチング展覧会に出品。この年までに「南洋群島」のサイパン、ロタを旅行した。1941年の南洋美術協会第1回展に油彩画《リーフの海岸》《チモロの家》、1942年の第2回展(1942)に油彩画《スコールのあと》と「南方共栄圏十五題」作品のひとつ《ボルネオ》、1943年の「海の日本 大壁画展」と題した第3回展に油彩画《引揚船作業》《朝鮮徴兵制度設けらる》を出品。また、きつつき会発行『きつつき版画集』昭和17年版(1942)に白黒の木版で制作した《サイパン》、『きつつき版画集』昭和18年版(1943)に木版画《甕を売る店(朱乙にて)》を寄せた。戦後は二紀会に出品し、1948年の第2回展で委員に推挙された。1974年(昭和49)年4月4日東京都で逝去。【文献】『美術家たちの「南洋群島」展』図録(町田市立国際版画美術館ほか 2008)(滝沢)

佐々木正康(ささき・まさやす)

東京に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中に印刷工芸科刀画会同人が発行した版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《京舞妓》を発表。1937年に同校を卒業。卒業後は上海の世界書局に勤務。現在『刀画』は2号のみを確認。【文献】『東京高等工芸学校一覧』昭和14年版(東京高等工芸学校 1940) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

佐々木 慰(ささき・やすし)

札幌の北大生を中心に札幌詩学協会が発行した詩・版画・演劇の芸術同人誌『さとぼろ』の通巻第8~12、15、16号(1926~1927)に詩や俳句など文芸作品を寄稿するが、その内で唯一第3巻2号(通巻12号)(1926.10)に木版画《Aの像》を発表している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

佐々木 陽(ささき・よう)

1929(昭和4)年の第2回プロレタリア美術大展覧会(12.1~15 東京美術館)に版画《レーニン》《戦争とは?》(木版画か)を出品。【文献】岡本唐貴・松山文雄『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967)(三木)

笹島喜平(ささじま・きへい) 1906~1993

1906(明治39)年4月22日栃木県芳賀郡益子町に生まれる。父・藤作は益子町長や栃木県会議員を務めた人物。1922年東京府立青山師範学校入学、図画教師赤津隆助の指導を受けて絵に興味を拓く。20歳の頃、帰省中に濱田庄司を訪ねてその人思想に感服、以来師と仰いだ。1927年師範学校を卒業して小学校教員となり、仕事のかたわら洋画や日本画、書を試みる。日本橋有馬小学校に勤務して

いた1937年11月、日本橋区教育会が主催した平塚運一の木版画講習会に参加して黒白版画の簡潔な美しさに魅せられ、以後制作を続けた。この講習会を記念した『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《那須温泉》を、第2号(1938.1)に《泊り舟》を寄せる。同じ1937年には濱田庄司に紹介されて棟方志功にも入門、表現者としてのあり方に大きな影響を受ける。1938年第7回日本版画協会展に《海水浴場》《城》《太海風景(一)》《同(二)》が初入選(9回展・10回展でも入選)、1940年第15回国画会展に《南豆の海》が初入選(16回展・17回展・19回展でも入選)、さらには翌年の第4回新文展でも大作《山道》が入選を果たし、これにより木版画に道を定めた。同じ1941年、平塚門下の集まりである「きつつき会」が発行した『きつつき版画集』昭和17年版(1942.8)に「中野喜平」の名で《外房波太にて》を発表(戦中の数年間は「中野」姓を用いたと推測される)。1942年に重い肺気腫をわずらい戦中は療養生活を送るが、この時期濱田庄司と繁く交流、また真岡の久保貞次郎と出会いその版画コレクションにふれるなどして大いに啓発された。1943年第18回国画会展で会友に推挙され、同年日本版画奉公会会員(ただし「中野」名)。1944年11月、国画会版画部秋季展に出品(同じく「中野」名)。終戦とともに教職を離れ、版画制作に専念。戦後は1946年の第2回日展に《滝》を出品、1948年日本版画協会会員となるが、1950年に同会を離れ、国画会(1949年より会員)および1952年に棟方や下沢木鉢郎らと創設した日本板画院を主な舞台に活動した。1957年には第1回東京国際版画ビエンナーレに入選、以後第5回展まで招待出品を続けている。1958年に肋膜炎に罹り医師から摺りを禁じられ、以後木版拓摺に転向、1959年の第33回国画会展に《風ある森》を発表して注目される。長く写生に基づく風景を描いてきたが、1960年頃より奈良や京都へスケッチに行くようになり、不動明王や吉祥天などの仏像に取材した作品を制作、拓摺とともに笹島の版業を代表するものとなった。1960年代よりサンパウル・ビエンナーレなど数々の国際展にも登場するようになり、画面は次第に整理されてゆき、1963年頃大田耕士の示唆により始めたエッチングプレスの使用や特殊な糊材の発見を経て、造型は立体的ともいえる独自のものに至った。1965年畦地梅太郎・北岡文雄・斎藤清・関野準一郎・橋本興家と「新秋会」を結成、1973年からは新たに富士山のシリーズに着手。1974年畦地らと新たに「朴林会」を結成。1979年《国土峠の富士》《不動明王 No.80》が昭和53年度文化庁優秀作品買上となる。1982年日本橋高島屋で喜寿を記念する回顧展を開催。1985年東京・府中から郷里益子に移住。同年日本版画協会名誉会員となる。1989年町田市立国際版画美術館で回顧展開催。1991年益子町で、翌年奈良県立美術館で「笹島喜平版画展」開催。1993(平成5)年5月31日益子町で逝去。【文献】『笹島喜平版画集』(講談社 1980)／『半画人 笹島喜平画文集』(美術出版社 1982)／『日本美術年鑑 平成6年版』(東京文化財研究所 1995)／吉田俊英「木版画家・笹島喜平」『奈良県立美術館紀要』18(2004.3)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』(東京文化財研究所

2006)／『創作版画誌の系譜』(西山)

笹原 亮(ささはら・とおる)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森、北陸などを回り、7月30・31日の2日間は北海道空知郡岩見沢中央小学校でエッチング・木版画・素描の講習会(講師:西田武雄・武藤完一・小野忠重など)を開催。当時、岩見沢常盤小学校に勤務していた笹原も参加し、その時の作品とみられるエッチングが研究所機関誌『エッチング』第70号(1938.8)に掲載されている。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70(1938.8)(加治)

笹森早苗(ささもり・さなえ)

青森県板柳町の板柳小学校において、1936年12月6日、今純三を講師に迎えて北郡版画同好会主催による木版とエッチングの版画講習会が開催され、川崎正人(木造中学校教諭)ほか教員8名と高等科生徒多数が参加した。同講習会には板柳小学校教諭の笹森早苗も参加し、『エッチング』51号(1937.1)に「セルロイド・ドライポイントに就いて」を寄稿。笹森は川崎正人とともに今純三の指導を受け、戦後も版画の制作と普及に関わり続けたという。【文献】『エッチング』50・51／江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)(樋口)

佐治文雄(さじ・ふみお)

1932年8月、上野の美術学校〔東京美術学校〕で行われた日本水彩画会夏期講習会の参加者を対象にした夜間エッチング講習会が日本エッチング研究所で開催され14名が参加。佐治文雄も参加者の一人として名を連ねる。当時東京市大伝馬町在住。【文献】『エッチング』1(樋口)

佐田正太郎(さだ・しょうたろう)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森、北陸などを回り、7月28～29日の2日間は北海道の名寄中学校(現・北海道立名寄高等学校)でエッチング・木版画・素描の講習会(講師:西田武雄、武藤完一、小野忠重など)を開催。当時、名寄中学校3年生に在学していた佐田も講習会に参加し、その時の作品とみられるエッチングが研究所機関誌『エッチング』第71号(1938.9)に掲載されている。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70(1938.8)(加治)

佐竹守一郎(さたけ・もりいちろう) 1888～1970

1888(明治22)年3月14日大阪に生まれる。俳句を河東碧梧桐に学び、『草迷宮句集 青愁』(柳屋書店 1914)を刊行。その後、演劇雑誌『劇と詩論』(玄文社、その後宝文社、清香社 1922.6～1928.10)に戯曲を発表。昭和5年以降は、香取仙之助の筆名で舞踏作家として活躍した。『芸美』第1年第1号(三笠美術店 1914.5)の消息欄によると、京都の佐々

木文具店が階上に開設した美術室において、松宮芳年・河合卯之助・森谷梢月らと並んで佐竹守一郎の版画展覧会が開かれたという。作品は未見。1970(昭和45)年7月14日大阪で逝去。【文献】『芸美』1-1(1914.5)／「コトバンク 20世紀日本人名事典解説」(樋口)

#### 薩摩千代(さつま・ちよ) 1907～1949

1907(明治40)年6月1日、会津藩主松平容保の三男・山田英夫の長女として、東京市麻布区笄町に生まれる。旧姓山田千代。女子学習院高等科に学び、1926年3月薩摩治郎八と結婚。同年9月治郎八と共にパリに渡り、ファッションモデルとして新聞や雑誌に取り上げられ、パリの社交界で話題となる。パリに渡ってから絵を描くようになり、藤田嗣治を通じてピエール・ラブラードに師事、サロン・ドートンヌやパリ日本人美術家展覧会などに出品した。1931年病に倒れ、モンブランに近いアルプス・メジェーヴなどのサナトリウムで療養生活を送った後、1933年頃に帰国。1937年長野県諏訪郡の富士見高原療養所(現・富士見高原病院)に入院、1949(昭和24)年3月14日同地で逝去した。版画の制作は、パリ時代にバレエの踊り子たちを描いた単色のリトグラフ(22.1×11.4cm T・Sのイニシャル版サイン)1点が治郎八の遺品の中から見つかった。【文献】『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録(徳島県立近代美術館ほか 1998.10～1999.4)／村上紀史郎『「バロン・サツマ」と呼ばれた男 薩摩治郎八とその時代』(藤原書店 2009)(樋口)

#### 佐藤 章(さとう・あきら)

1939(昭和14)年の第3回造型版画協会展に版画《母》《習作》《橋》《アンテナ》《袋小路》《油槽船》を出品し、新版画家賞を受賞。『美之國』第70号(1939.7)に出品作《油槽船》の図版が掲載されているが、銅版画と思われる。また、同年10月の『エッチング』第84号には「カリカレ」の同人佐藤章氏は目下研究所でエッチング実習中」との記事があり、12月の『エッチング』第86号には「エッチング研究所製プレッス」所有者として紹介され肩書には「東京洋画家」とある。翌1940年の第4回展にエッチング《ニコライ堂》、1941年第2回日本エッチング展に《ニコライ堂》《裏町》を出品した。なお、戦前・戦後の文展・日展・東光会展などで活躍した洋画家佐藤一章(1905～1960 本名・章)と同一人である可能性もある。【文献】『造型版画協会第三回展目録』(1939)／『美之國』70(1939.7)／『造型版画協会第四回展目録』(1940)／『日本美術年鑑』昭和15年版(美術研究所 1941)／『エッチング』84・86・101／『日本美術年鑑』昭和36年版(東京国立東美術研究所 1962)(三木)

#### 佐藤雨山(さとう・うざん) 1893～1959

1893(明治26)年青森県南津軽郡黒石町前町に西谷彦太郎の次男として生まれる。本名は耕次郎。佐藤家を継ぐ。南津軽郡立農学校卒業後、黒石町立実業補修学校を初めとして青森県立黒石高等学校などに勤務。教員の傍ら郷土の歴史・遺跡・伝説・風俗・

民話の研究に、またこの地方の植物の研究にも力をいれ、『黒石地方誌』『植物天然色図鑑』などの著作を多数上梓する。柴田女子高等学校での授業中に脳溢血で倒れ、1959(昭和34)年10月1日逝去。版画の制作は、黒石町で安芸蜻一らが発行した版画誌『はなが』第2号(1933.2)に《町はづれ》《山村の朝》《真夏の花》《茸》、第3号(1933.3)に《志羅神様》《南国の百合》ほか2点を出品。現在、『はなが』の創刊号は確認できず。【文献】『青森県人名大事典』(東奥日報社 1969)／「佐藤雨山略年譜」『黒石地方誌復刻版』(津軽書房 1973)(加治)

#### 佐藤清孝(さとう・きよたか)

大分県大野郡で生野正義ら教員仲間が発行した版画誌『大野版画』(1933～1934)の第1号(1933.12)に《ばせう》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤齊一(さとう・さいいち) 1893～1967

1893(明治26)年岐阜県に生まれる。1913(大正2)年に上京、1918(大正7)年北神保町に謄写版の器材販売と印刷をおこなう佐藤兄弟商会を開店した。佐藤はこの店先に飾り窓を設けて自身の店で製作した謄写印刷による美しい実物見本を展示することで、のちに優れた仕事を残す多くの若者たちを引きつけた。佐川義高もその一人であった。また、技術者の協力を得て、彼らが求める鏝などさまざまな器材の改良、開発を手がけ、謄写版の表現に幅をもたらした。1932(昭和7)年には最初の謄写印刷業団体「東京謄写印刷業組合」を結成して組合長を務めたことをはじめ、業界全体にも貢献した。1967(昭和42)年逝去。【文献】佐藤齊一『佐藤兄弟商会案内』(1931 佐藤兄弟商会)／須永襄編『昭和堂月報の時代』(大日本印刷株式会社 ICC 本部 2000)／幅和弘『ショーワ60年史』(株式会社ショーワ 1988)／『軽印刷全史』(社団法人日本軽印刷工業会 1989)(植野)

#### 佐藤左源治(さとう・さげんじ)

東京府下野方の上沼袋にあった日本印刷学校の版画研究会が発行した『創作版画作品集』第2輯(1932.3)に《習作》を発表。【文献】『創作版画作品集』2(加治)

#### 佐藤三郎(さとう・さぶろう) 1908～1997

1908(明治41)年山形県酒田市内匠町に生まれる。1931年酒田新聞社に入社。1946年『週刊酒田』『日刊庄内』『サンデー庄内』などの主幹を経て、1959年には山形新聞社に論説委員となる。1932年、同級生の洋画家小野幸吉の遺作集を出版。1947年には山形県庄内地方の大地主であった本間家の収集品を納めた本間美術館の創設に尽力し、後年副館長に、その後館長に就任。また山形県芸術文化協会副議長など多くの役職に就く。庄内の文化を高めるために鶴岡市教育委員会が創設した高山樗牛賞(第15回)を1972年に、1973年には酒田市文化功労賞、1993年には齋藤茂吉文化賞を受賞。著作には『酒田の本間家』『庄内藩酒井家』、『歌集 ソ連の旅』などがある。版画関係では洋画家小野幸吉の友人達が酒田で

発行した版画誌『隕石ト花々』第1号(1933.1)に《野菜》《築港風景》《サボテン》を発表。1997(平成9)年に逝去。【文献】佐藤三郎『酒田の今昔』(東北出版企画 1973) / 「齋藤茂吉文化賞受賞者」(山形県HP) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤七郎(さとう・しちろう)

山形県酒田市で洋画家小野幸吉の同級生など友人達が発行した版画誌『隕石ト花々』第1号(1933.1)に《静物》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤昇平(さとう・しょうへい)

1935年8月、大分県師範学校主催の創作版画講習会(8.1~5 講師:平塚運一・畦地梅太郎)に参加し、その時制作した作品《山路》は武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第8号(1935.10)講習会記念号に掲載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤四郎(さとう・しろう)

山形県酒田市で洋画家小野幸吉の同級生など友人達が発行した版画誌『隕石ト花々』第1号(1933.1)に《夏》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤清蔵(さとう・せいぞう)

青森県師範学校図画科嘱託だった今純三より絵画と版画の指導を受け、1931年頃に「コバルト会」(通称青師コバルト会、1924年青森県師範学校の図画好きの有志が集まって結成された)の会員となる。1932年同校4年次に江渡益太郎・前田兼太郎・飯田輝夫と4名で「青師版画研究会」を結成。機関誌『刀の跡』を2号まで刊行する(1932.4-5)。1932年7月開催の青師図画展(11.4-6)に木版画《潮波》《風景(一)》《風景(二)》《瀨》《無題》を出品。[1934年]同師範学校卒業。卒業後も版画制作を続け、黒石高校などに勤務の傍ら、版画教育の普及に尽す。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房1979)(樋口)

#### 佐藤盛太郎(さとう・せいたろう)

1939年8月に西田武雄を招いて行われた豊橋〔エッチング〕講習会(28・29両日)に参加。細島昇一(愛知県豊橋中学校教員)が中心となって結成された「豊橋エッチング協会」の会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47・48 (樋口)

#### 佐藤仙之助(さとう・せんすけ)

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』の第1号(1934.9)に《港ノ雪》、第2号(1935)賀状号に《南天》、第3号(1936.7)に《湖畔》を発表。また、長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第6輯(1935.4)に賀状(『葵』第2号の《南天》と同じ)が発表されている。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌『櫟』『臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤 敬(さとう・たかし) 1906~1978

1906(明治39)年10月28日大分県大分郡大分町に生まれる。1925年大分県立大分中学校を卒業。上京し、川端画学校洋画部に学ぶ。1926年東京美術学校西洋画科本科に入学。1928年第1回プロレタリア美術大展覧会に「支健二」の名で《肖像》《靴屋》を出品。翌1929年第10回帝展に油彩画《若き男の像》が初入選。翌年の第11回展も入選。1930年から1934年まで渡仏。その間、在仏のまま1931年東京美術学校西洋画科本科を卒業。帝展にも作品を送り、同年の第12回展から1934年の第15回展まで連続して入選。第13回展(1932)の《レ・ケルン》では特選を受け、新進の作家としての地位を固めた。また、1931年から1933年のサロン・ドートンヌ(パリ)にも入選している。帰国後の1935年には、帝展改組の動きに反対し、「第二部会」の設立に参加。同会の第1回展で特選(文化賞)を受賞し、会員に推挙されるも、翌1936年に退会し、猪熊弦一郎・小磯良平・脇田和らと「新制作派協会」を創立。以後、同展の中心的作家として活躍したほか、戦後は美術団体連合展(1~5回 1948~1951)、秀作美術展(2・3・6回 1951・1952・1955)、カーネギー国際美術展(ピッツバーグ)などにも出品。1952年に渡仏し、以後パリを拠点に制作。画風も具象から抽象に転じ、1960年の第30回ヴェニス・ビエンナーレ国際美術展などに出品。また、欧米各地でもしばしば個展を開催した。1978(昭和53)年母親の病气見舞いのため帰国したが、5月8日別府市の実家で逝去。戦前の版画としては、1936年に開催された第11回国際オリンピック大会芸術競技(ベルリン)に出品した銅版画《スキー》がある。【文献】『佐藤敬とその周辺』展 図録(大分県立芸術会館1999) / 『日本美術年鑑』昭和54年版(東京国立文化財研究所1981) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所2006) / 『第十一回オリンピック芸術競技参加報告』(大日本体育芸術協会1936)(三木)

#### 佐藤武造(さとう・たけぞう) 1891~1972

1891(明治24年)4月4日長野県下高井郡瑞穂村字関沢に生まれる。1903年長野県立飯山中学校に入学。在学中の1907年8月、河合新蔵と丸山晚霞を講師とする水彩画夏期講習会に参加し、画家になることを決意したという。翌1908年中学校を卒業し、上京。精美堂の石版画工として働きながら、河合・丸山らの指導する日本水彩画会研究所に通い、デッサンを学ぶ。その後、研究所で知遇を得た荻原守衛の勧めもあり、1914年渡英。ロンドンでは山本鼎と知り合い、山本の木版画制作の手伝いをしたという。1915年第106回ロイヤル・インスティテュート展に絹絵(絹地に岩彩)2点が入選。同年ロンドン市立チェルシー美術学校に入り、油彩画のほか、1920年から2年ほどエッチングも学んでいるが、研究所生活については「英国に於ける私の学校生活」(『アトリエ』4-3 1927.3)に詳しい。1920年から1923年にかけて毎年個展を開催。絹絵が高い評価を得たが、1923年の個展には木版画3点も出品したようである。1924年帰国。翌1925年に個展(5.24

～28 銀座・松屋)を開催し、水彩(絹地描)・素描・エッチングなど約200点を展示。『アトリエ』第2巻第7号(1925.7)に岩崎楯吉の展評とエッチング《女》水彩画《ホットケー》の図版が掲載された。版画についてはその他の情報はないが、その後1928年に構造社絵画部の客員となり、同年の第2回展から第6回展(1932)まで出品。1932年に再び渡英し、たびたび個展を開催して絹絵・漆絵を発表するも、第二次世界大戦勃発のため1939年に帰国。帰国後は画壇に属さず、自ら名付けた漆絵「瑞漆画」の研究・制作に没頭し、個展を中心に作品を発表した。1972(昭和47)年3月14日東京都新宿の自宅で逝去。【文献】『構造社一昭和初期彫刻の鬼才たち展』図録(宇都宮美術館ほか 2005) / 『アトリエ』2-7・4-3(1925.7・1927.3) / 『長野県美術全集<第8巻>信州の水彩画と版画芸術一斬新な才気と多彩な美術運動』(郷土出版社 1993)(三木)

#### 佐藤達雄(さとう・たつお)

朝鮮釜山在住の清永完治によって発行された版画誌『朱美之集』第1冊(1940.5)に《踊》、第2冊(1940.8)に《習作》を発表。当時、東京市小石川区指ヶ谷町77に居住し、東京聾啞学校函画手工室に勤務していた。【文献】『第2回会員名簿』『朱美通信』(2号 [1940.8]) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤朝山(さとう・ちようざん) 1888～1963

1888(明治22)年8月18日福島県相馬郡中村町(現・相馬市)に生まれる。本名清蔵。旧号「朝山」、後に「玄々」と号す。生家は宮彫師で、幼少より木彫の技術を学ぶ。1905年上京し山崎朝雲に師事。1913年より「朝山」と号す。同年平櫛田中の勧めで再興日本美術院第1回展に《呪詛》ほかを出品し、同人となる。1922年日本美術院研修生として2年間フランスに学び、ブールデルに師事。1937年帝国芸術院会員。1939年紀元2600年記念の皇居お濠端の銅像《和氣清麿像》の建立をめぐって師朝雲と対立し「朝山」号を返上する。その後暫くは本名の「清蔵」で制作。1948年からは「玄々」と号した。1949年京都・妙心寺塔頭大心院にアトリエを構え定住。三越創立50周年記念事業として約10年間の歳月をかけた木彫《天女(まごころ)の像》を完成、三越日本橋本店ホールのシンボルとして知られる。1963(昭和38)年9月14日京都で逝去。

版画の制作は、滞欧時代(1922～1924)あるいは帰国直後に制作したと思われる木版画《エジプト彫刻断片》《眼》《影》《憂》《エトラスカン婦人》と、1924年頃の制作と思われる木版画《童女》が東京文化研究所アーカイブデータベースなどに記されているが、作品は未見。なお、図版で確認できるのは、『アトリエ』第5巻第1号・創作版画號(1927.1)所収の恩地孝四郎寄稿「創作版画回顧」で紹介されている木版画《女の顔》[この作品が上述の《影》か]、同じく『アトリエ』第5巻11号(1928.11)所収の河野通勢寄稿「大調和展入選画に就いて」で紹介されている〔木版画〕《無題版画》の2図。【文献】『生誕100年 中村彝・中原悌二郎とその友人たち』展図録(茨城県近代美術館・福島県立美術館ほか

か 1989) / 『秋季特別展 甦る近代木彫の鬼才 佐藤朝山展』パンフレット(井原市立田中美術館 2006.10.27～12.10) / 「佐藤清蔵」『東文研アーカイブデータベース』(2015.8.15)(樋口)

#### 佐藤貞一(さとう・ていいち)

1920・30年代の京城(現・韓国ソウル市)に在住。京城帝国大学医学部解剖学教室(現・ソウル大学)に勤務し、解剖図を描いていた。創作活動としては、1925年の第4回朝鮮美術展に油彩画が入選。その後も、第7～10回展(1928～1931)に入選したが、1931年の第10回展は版画《薬水》での入選だったという。その間、1929年2月に個人展(京城歯科医学専門学校)を開き、10月の第10回帝展(東京)に油彩画《死》が入選。12月に京城で開催された「朝鮮芸術社試作展」には木版画《馬》を発表している。またこの頃、多田毅三・鈴木卯三郎・早川良雄らと「朝鮮創作版画会」を結成。翌1930年1月には、現在確認できる朝鮮における最初の版画同人誌『すり繪』を刊行し、《馬》[1929「朝鮮芸術社試作展」出品作]を発表。3月に「朝鮮創作版画会第1回展」(3.15～17 京城・三越)を開催し、4月には「佐藤貞一創作版画頒布会」が企画された。趣意書によれば、《昌慶苑(博物館ヲ望ム)》《昌慶苑(動物園)》《昌慶苑(冬)》《城ノ跡》(以上大板)、《お正月》《祭日の子供等》《京城風景》(以上中板)、《朝鮮部落風景》《子供トオムニ》(以上小板)の9点があり、10作品目は制作中とある。各作品とも限定部数を30部としているが、現在確認できる作品は、《祭日の子供等》が含まれる中板の3点である。1931年3月には「朝鮮創作版画会第2回展」(3.27～29 京城・三越)を開催。4月の第6回国画会展に《夜の三越(京城)》《雪の橋(契忠壇)》、9月の第1回日本版画協会展にも《水蓮》が入選している。その後、1932年1月に「朝鮮創作版画会」主催の版画研究会を開いたようである。【文献】辻(川瀬)千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開—「朝鮮創作版画会」の活動を中心に—」『名古屋大学博物館報告』30(2015) / 『日韓近代美術家のまなざし—「朝鮮」で描く』((神奈川県立近代美術館・岐阜県美術館ほか 2015.4.4～2016.2.2) / 『創作版画誌の系譜』(河野)

#### 佐藤哲三(さとう・てつぞう) 1910～1954

1910年(明治43)1月24日新潟県古志郡長岡町(現・長岡市)に生まれる。翌1911年に母、兄姉とともに父の実家である新発田の家に移り住む。1915年(大正4)脊椎カリエスを患い、身体的な障害を負った。1923年、この年東京美術学校函画師範科に入学した兄十蟻の影響で初めて油彩画を描く。1925年新発田尋常高等小学校を卒業するも、身体的障害により中学への進学を断念した。この頃から画家になる志を抱くようになる。1926年新発田在住の若い仲間たちと絵画グループ「野人社」を結成、第1回展を開催した。1927年野人社第2回展を開催、またこの年、新発田近郊の画家、教師、文化人らによる文芸誌『土塊』(つちくれ)に同人として参加、12月創刊の同誌に木版画《習作》を寄せた。その後、翌1928年発行の第2号(1月)、3号(3月)にも木版

画を発表した。1928年国展に初入選、第2回大調和美術展にも入選する。1929年国展に入選、翌1930年の国展では出品作の《赤帽平山氏》が国画奨学賞を受賞、新発田を拠点に創作活動する画家として存在感を示した。この年初の個展を新潟新聞社で開催、1927年の大調和美術展で落選したことに納得できず上京し、そのときに指導を受けた梅原龍三郎が文章を寄せて展覧会目録を刊行した。この頃から国画会を通じて武者小路実篤ら白樺派系の文学者、東京在住の文化人らと急速に交友の幅を広げた。1931年、国展で再び国画会奨学賞を受賞、翌1932年同展への出品で毎日新聞0氏賞を受賞、国画会の会友となった。1934年新版画集団第4回展を訪れ、その展覧会評を『浮世絵藝術』3巻6号に寄稿、藤牧義夫の《赤陽》を激賞する。1938年新潟新聞社で第2回個展を開催、国画会展出品作を中心に43点を出品、強い共感を得た。1939年、妻の家族が営む新発田郊外の加治村の自転車店に引っ越し、農村社会と農民をテーマとする制作にとりかかる。1940年国画会第15回展出品作の《農婦》が羽仁五郎に買い上げられ、その一方で児童美術教育に本格的に取り組み始めたことで、以来羽仁および羽仁から紹介された久保貞次郎と交友する。この年、紀元二千六百年奉祝美術展に石版画《みのり》を出品する。1943年国画会会員となる。1945年、戦後しばらくは自転車店の経営と地域の民主化運動、教員組合運動、文化運動などに奔走し作品制作が停滞する。1949年新発田泉町の家に移り、制作に専念した。1950年以降は病のため入院を繰り返しつつ制作、国画会展や新発田での展覧会で発表、1953年には戦後の代表作となる《みぞれ》を完成させた。1954(昭和29)年6月25日新発田で逝去。【文献】『佐藤哲三展』図録(神奈川県立近代美術館ほか 2004)／『佐藤哲三の時代』展図録(新潟県立万代島美術館 2008)(滝沢)

#### 佐藤十蟻(さとう・とあり) 1903～1946

1903(明治36)年新潟県北蒲原郡新発田町(現・新発田市)寺町の旧新発田藩士の家に生まれる。本名は重義。洋画家佐藤哲三は七歳下の弟で、影響を与え、弟を画家へと向かわせる。1921年、県立新発田中学を卒業。在学中に公募展「白骨画会」を発足させ、洋画グループ「1921年社」の結成にも参加。1922年3月県立新潟師範学校を卒業し、新潟市関屋尋常小学校の訓導となる。1923年、東京美術学校国画師範科に入学し、1926年に卒業するが、病気療養のため帰郷。1927年、「人生は生活である。生活なき人生は死である。」という考えから「あらゆる芸術に含まれる分子は総合されて共に創造的人生の沃野を開拓したい。」(十蟻の発刊の言葉より)として文芸・美術など芸術を扱った同人誌『土塊』(1927～1929)を十蟻が中心となって創刊する。第1号から3号まで編集発行人を務め、版画・詩・評論を発表。版画は第1号(1927.12)に《壁紙図案単位》、第2号(1928.1)に《柘榴》《賀状》、第3号(1928.3)に《花》を発表するが、詩は最終号7号まで続けている。1928年、新潟県立村上高等女学校に赴任し、図画と国語を教え、1931年には栃木県立宇都宮女子高等師範学校に出向。その後宮崎に赴任し、1944年

帰郷。1946(昭和21)年新潟県新発田で逝去。このほか、1935年には「重義」の名で第10回国展に絵画《松林》が入選し、1936年の第11回国展には「十蟻」の名で染色刺繍2点を出品したように、絵画・版画・工芸・詩・評論と幅広い制作活動を行なった。【文献】新潟県立万代島美術館編『佐藤哲三の時代』展図録(「佐藤哲三の時代」展実行委員会 2008)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤十弥(さとう・とうや) 1907～1980

1907(明治40)年山形県酒田市で生まれる。法政大学中退後、東京で雑誌社などに勤めながら、作家を目指したが帰郷。地元で詩人、画家、デザイナーとして幅広く活躍し、酒田の出版文化、商業美術界の先駆者として地域の文化活動に大きく貢献する。1974年には庄内の文化を高めるために鶴岡市教育委員会が創設した高山樗牛賞の第17回を、1977年には第23回齋藤茂吉文化賞を受賞。1980(昭和55)年逝去。版画作品としては、酒田で洋画家小野幸吉の同級生など友人達と発行した版画誌『隕石ト花々』第1号(1933.1)に《顔》《洋館風景》《洋燈》を発表。著作には『かられる物語』『つぶらなるもの』などの詩集がある。【文献】「齋藤茂吉文化賞受賞者」(山形県HP)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤俊雄(さとう・としお)

東京の日本橋城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による教師対象の木版画講習会(1937.11.25～30 講師:平塚運一)に参加。その作品《南海》は、講習会の記念に創刊された版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に掲載され、その第2号(1938.1)には《子供》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤俊春(さとう・としはる)

長野県上水内郡信濃尻に生まれる。長野県師範学校一部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第3号(1941)に《土蔵》を発表。1945年同校を卒業し、長野東部中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

#### 佐藤正夫(さとう・まさお)

九州大分で武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第17号(1938.5)にエッチング《魚住の滝》を発表。当時、『九州版画』は木版が主流であった版画誌の中で、エッチングの作品が多く掲載されていて、《魚住の滝》もその1点である。当時、佐藤は県内で教職についていたと考えられている。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 佐藤正光(さとう・まさみつ)

→佐藤米太郎(さとう・よねたろう)

#### 佐藤三重三(さとう・みえぞう)

→清水三重三(しみず・みえぞう)

### 佐藤深雪(さとう・みゆき)

生没年不詳。アナキストらによる文芸雑誌『野獸群』の美術号として有泉譲と阿部貞夫が編集し、1926年10月に発行の版画誌『構成派』に、工場と労働のイメージを表現したと思われる木版画〔リノカートの可能性あり〕《無智にしてユ快なる職工》を發表した。その年5月に東京自治会館で開催の、横井弘三企画「理想大展覽会」の出品目録に「佐藤深雪」の名が見られ、有泉譲と阿部貞夫ら『構成派』関係者がこの展覧会に出品していたことや、横井弘三が『構成派』に版画を寄せていたことから、同一人物と推定できる。目録記載の佐藤の肩書は「小螺子製造」、住所は「東京市芝区三田壱ノ式四番地」であり、出品作品は《废物利用作品 正雄の美術銀》《废物利用作品 或る都》《废物利用作品 夢の間屋箱》の3点であった。これら以外の活動は不明。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) / 『創作版画誌の系譜』(滝沢)

### 佐藤芳雄(さとう・よしお)

九州大分の武藤完一が発行した版画誌『彫りと摺り』第2号(1931.11)に木版画《鶴見山》、第6号(1932.12)に木版画《朝鮮風景》を發表。『朝鮮風景』については「今年の夏休、朝鮮旅行中のスケッチより、三浪津近くにて」とコメントしている。また、大分県師範学校内の大分県美育研究会が発行した『郷土図画』第1巻5号(1931.10)版画特集号に《風景》が掲載されている。その後、エッチング技術を習得し、1933年には西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第13号(1933.11)にエッチング作品を發表。その制作者として大分県師範学校5年生と紹介されていることから『彫りと摺り』や『郷土図画』掲載の版画を制作したのは師範学校在学中の3~4年生の時期と推測される。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1号 2002.9) / 『エッチング』13 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

### 佐藤義重(さとう・よししげ)

エッチング作家で宮崎県師範学校美術教師の有田四郎と二人で武藤完一を講師に招き、1939年8月に宮崎県女子師範学校に於いて木版画及びエッチングの講習会を開催する(7・8日は木版画、9日はエッチング)。当時、宮崎県女子師範学校勤務。版画作品は未見。【文献】武藤隼人「版画家・武藤完一資料集(戦前篇I) - 作家年譜を中心として -」『東京学芸大学大学院教育学研究科美術教育専攻修士論文』(2010.2)(樋口)

### 佐藤米次郎(さとう・よねじろう) 1915~2001

1915(大正4)年1月1日青森県青森市に生まれる。米治郎とも号す。兄は同じく版画家の佐藤米太郎。青森県立青森中学校在学中の1929年夏頃、青森初の創作版画誌『緑樹夢』を根市良三、柿崎卓治とともに創刊。これが周囲の若者を刺激し、緑樹夢社を発展的に解消する形で1931年6月に「青森創作版画研究会・夢人社」を結成、同年同月『彫刻刀』を創刊(1932年12月の17号まで続刊)。それにと

もない『緑樹夢』を3号で終刊となす。1932年青森中学校を卒業、4月に第1回夢人社展を開催(於聖公堂)。同年新版画集団にも参加している。『彫刻刀』はこの年の末に終刊とし、翌1933年1月より『陸奥駒』と改題して刊行を続けた(1935年12月の20号まで続刊)。1933年青森県蚕糸加工教師となって七戸に移り、地元紙に木版による七戸風景を連載。1934年青森に戻り、今純三の推薦により東奥日報社入社、事業部員として東奥美術展などを担当する。仕事のかたわら版画制作を続け、同年4月第2回夢人社展開催(於県立図書館)。1936年、七戸の藤森牧場に取材した《馬楽荘の庭》で第5回日本版画協会展に初入選(以後7回・10回・11回展に入選)。翌年には国画会でも《藤森牧場》により第12回展に初入選(以後13回・18回・19回展に入選)。1938年、木造小学校に講師を招いて「エッチングと木版画講習会」を開催(主催代表は今純三)、『エッチング』70号(1938.8)に「西田先生、武藤先生、小野先生、林先生を迎へて - 東奥日報社にて -」を寄稿する。1930年代にはこうした活動に加えて、多くの創作版画誌や関連印刷物を主催、あるいは編集に協力している。まずは既述した『緑樹夢』から『彫刻刀』、『陸奥駒』へと至る流れがあり、小学校の教材として1934年の『小品版画集あをもり』(全4号か)と1935年の『不那の木』(全8号か)が続き、また情報誌として1936年の『糸・あをもり』(全3号か)と1938年の『むつごま』(1939年9月の9号まで続刊)がある。さらには1939年、『陸奥駒』の後継誌として『青森版画』を刊行している(全2号、1939.2および1939.5)。青森県外の創作版画誌への参加も数多く、列記すると東京の『白と黒』『版芸術』『土俗版画集』『おもちゃ絵集』『版画蔵票』(以上白と黒社)、『新版画』、静岡の『かけた壺』『ゆうかり』『版画座』、長野の『櫟』、大分の『彫りと摺り』『九州版画』、朝鮮の『朱美之集』などがある。ほかにも『エッチング』への寄稿や中田一男の蔵書票誌『エクス・リブリス』への参加が知られる。また蔵書票作家としても先駆的存在であった。遡るが、1929年に斎藤昌三『蔵書票の話』を県立青森図書館で見出し、挿まれている多色摺の蔵書票に魅せられて試みたという。翌年から『版画蔵書票』を版行、七戸にいた1933年にも3集発行したといい、1934年から『サトウ・ヨネジロー蔵書票集』を(1936年までに全10集)、1936年から『趣味の蔵書票集』を(1940年までに全5集か)、翌年から『月刊蔵票』を(1938年までに全6集か)、いずれも連刊するなどその活動はめざましかった。

1940年1月、先に渡朝していた兄・米太郎のすすめで朝鮮仁川に移住、株式会社朝鮮製鋼所で広報物のデザインを手がける(その後仁川石炭作業株式会社や仁川港運株式会社に転じる)。同年5月、仁川府公会堂と仁川公立女学校において第1回版画展開催、自身の作品のほか恩地孝四郎や川上澄生らの作品、さらに日本版画協会による《新日本百景》のうち30点を展観する。1941年4月、第5回造型版画協会展に《仁川風景》A-Gを出品。同年『エッチング』102号(1941.7)に「第二十回鮮展を見て」を寄稿し、朝鮮の版画はこれからだという見解を示す。

同年10月斎藤昌三の協力のもと蔵書票展覧会を開催（朝鮮新聞社と書物展望社共催、於京城府三越ホール）、恩地らの特別出品も多数迎えて充実の展覧とした。1942年朝鮮美術展第21回展に《仁川三題》入選、翌年の22回展でも《風景》が入選。1943年日本版画奉公会会員、同年日本版画協会会員推挙。翌年春に京城竜山部隊に入隊し、3か月で除隊となった。

戦後は1946年春に帰青、まずは青森中学校で教鞭をとる。かたわら兄と「青い森社」を立ち上げ、8月に小冊子『青い森』を（1948年の9号まで続刊）、11月には児童月刊誌『陸奥の子』を創刊して（1949年の8号まで続刊）文化復興に尽力、1949年には再び東奥日報社事業部に所属し、展覧会の企画などを手がけた。1950年1月に青森版画サークルを立ち上げて『青森版画』を復刊し（2号から「青森版画会」に、1956年から「青森県版画会」に改称）、青森だけでなく弘前や八戸でも版画展を開催するなど版画界の振興にも尽くした。私家版で『青森豆本』を60冊あまりも世にだすなど、豆本界でもその名を知られた。1971年第1回青森市文化功労賞受賞、以後文化功労者としての受賞も数多い。昭和のはじめ以来長く、そして数多の自作により青森の創作版画界を牽引し続けた大切な人であった。2001（平成13）年6月22日逝去。【文献】佐藤米次郎『木版の作り方』（財団法人青森県教育厚生会 1976）／佐藤米次郎「えきす・りぶりす生活五十五年 蔵書票自分史（戦前篇1）・（戦前篇2）」『これくしょん』7・8（吾八書房 1988.12・1989.4）／『新版画』4（1932.9）／『日本版画協会々報』34（1940.10）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）／『エッチング』87・102・108／『創作版画誌の系譜』（西山）

#### 佐藤米太郎（さとう・よねたろう）1912～1958

1912（明治45）年青森県青森市に生まれる。弟は同じく版画家の佐藤米次郎。今純三や棟方志功、松木満史らとの交際からはじめ油絵を手がけ、青森中学校の美術教師であった南部興鎮に師事、南部の雅号「南天光」にあやかり「正光」と号す。やがて木版画を始めた弟に影響されて版画に着手、1930年青森初の創作版画誌『緑樹夢』に参加（2号、3号を確認）。翌年6月米次郎が「青森創作版画研究会・夢人社」を立ち上げて『彫刻刀』を創刊すると同人となり、以後は「夢人庵」と号す。夢人社の結成からまもなく叔父をたよって朝鮮へ渡り、仁川へ移住するが、仁川税務署に勤めるかたわら制作を続け、朝鮮風俗に多く取材した。創作版画誌への参加は、米次郎が主催したものが中心である。既述した『緑樹夢』に続き、『彫刻刀』には第1号から「夢人庵正光」あるいは「夢人庵」名、あるいは本名で発表（～8号、11号、12号、14号～終刊17号まで）、『彫刻刀』の後継誌である『陸奥駒』（1号、4～8号、10号、12号、14号、17号、18号、終刊20号）、さらにその後継誌『青森版画』にも参加している（1・2号）。また夢人社が発行あるいは後援した『小品版画集あをり』1集と『不那の木』4集、米次郎が主催した『サトウ・ヨネジロー蔵書票集』や『趣味の

蔵書票集』にも作を寄せている。青森以外の版画誌では、『白と黒』（23号、25号、31号）と『版芸術』（15号、ただし『陸奥駒』4号収録作品と同図）に作がある。展覧会での活動には1931年の第1回東奥美術展での入選があり（《無題》ほか）、1940年には第15回国画会展に《洗濯婦女》で初入選。以後18回展（《夏日》）、19回展（《朝風》）でも入選を重ね、1944年の第23回朝鮮美術展にも《夏日》《朝風》を入選させている。戦後は青森に帰り、米次郎とともに「青い森社」を創設、出版業に関わった。また県内小学校での版画講習会に講師として参加したほか、1953年には豆本作品『十和田湖の伝説』（緑の笛豆本の会）を刊行している。1958（昭和33）年6月逝去。【文献】佐藤米次郎『木版の作り方』（財団法人青森県教育厚生会 1976）／関野準一郎「思い出の人 思い出の風景 5 大夢庵像」『北の街』201（1979.5）／江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』（津軽書房 1979）／佐藤米次郎「えきす・りぶりす生活五十五年 蔵書票自分史（戦前篇1）」『これくしょん』7、吾八書房（1988.12）／『青森県近代版画のあゆみ展』図録（青森県立郷土館 1995）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』展図録（青森県立郷土館＋東奥日報社 2005）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』／辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開—朝鮮創作版画会」の活動を中心に—『名古屋大学博物館報告』30（2015）（西山）

#### 里見 淳（さとみ・とん）1888～1983

1888（明治21）年7月14日、鹿児島出身の有島武の四男として横浜税関長舎に生まれる。本名英夫。生後間もない11月母方山内家の養子となり、山内姓を名乗る。長兄は有島武郎、次兄は有島壬生馬（生馬）。1897年1月学習院初等科三年に編入学。1900年9月学習院中等科に進学し、児島喜久雄と親しくなり、この頃から兄壬生馬やその友人志賀直哉から文学の手ほどきを受ける。1902年児島らと「壬寅会」を作り、絵画・作文を持ち寄る。1904年には児島らと「絢友会」を作り、『絢友会誌』に児島と共に『鎌倉物語』を掲載する。翌年壬生馬がイタリヤ留学に出発するに際し、英夫のことを志賀直哉に託し、志賀との交際が親密になる。高等科へ進学し、1908年から『輔仁会雑誌』に寄稿したり、回覧雑誌『麦』『桃園』『暴夜』を創刊し、志賀・武者小路実篤・木下利玄・柳宗悦・園池公致等との係わりが深くなる。1909年東京帝国大学英文科に入学するが間もなく退学する。この年10月、第3回文展会場でバーナード・リーチに紹介され、上野の自宅を訪う。それをきっかけに児島と共に週一回リーチの家に通い、銅版画技法を学ぶ。1910年2月28日『望野』『麦』『桃園』が合同し、有島武郎・有島壬生馬・山脇信徳・梅原良三郎・細川護立を加えて『白樺』を創刊する。9月前後には『白樺』の多忙を理由にリーチ画塾から遠ざかる。この間に《築地河岸》《自画像》《志賀直哉像》《レンブラント「自画像」模写》《ツオルン「女」模写》《同「自画像」模写》などの銅版画を制作してい

る。1911年1月には『白樺』編輯長となる。この年11月に創刊された北原白秋主宰の『朱鸞』(1913年廃刊)の表紙絵を描いたりするが、志賀から忠告されその後は文筆家一筋の道を歩む。代表作には『善心悪心』(1916)、『多情仏心』(1924)、『極楽とんぼ』(1961)などがある。長年鎌倉に住み鎌倉文士の長老として存在し、1983(昭和58)年1月21日鎌倉で逝去。【文献】小谷野敦『里見弴・詳細年譜』(<http://homepage2.nifty.com/akoyano/satomiton.html#1830>) / 小谷野敦『里見弴伝―「馬鹿正直」の人生』(中央公論新社 2008.12)(森)

#### 里見文雄(さとみ・ふみお)

京都創作版画会第2回展(会期不明 1930～1932年の間に開催か)に木版画《雪ふり》を出品。なお、富山県出身で1927年に京都市立絵画専門学校を卒業した日本画家里見米菴(1898～1993 本名・文雄 米山人とも号す)と同一人である可能性もある。【文献】岡田毅『京都における創作版画運動の展開』『京都府総合資料館紀要』12(1984) / 『20世紀物故日本人画家事典』(美術年鑑社 1998)(三木)

#### 真田光三郎(さなだ・こうさぶろう)

1929(昭和4)年の第9回日本創作版画協会に木版画《朝鮮牛の図》を出品。【文献】『日本創作版画協会第九回展覧会目録』(日本創作版画協会 1929)(三木)

#### 真田久吉(さなだ・ひさきち) 1884～1946頃

1884(明治17)年11月20日東京文京区に生まれる。白馬会研究所に学び、1909年東京美術学校西洋画科卒業。1912年ヒュウザン会結成に参加、同年第1回展に《林檎》他7点を出品、第2回展に《花》他12点を出品する。早稲田大学の舟木重雄・広津和郎らに葛西善蔵が加わって1912年9月に創刊された文芸雑誌『奇蹟』に小林徳三郎・川上邦世らと共に参加。第1巻第2号(1913.10)と第2巻第1号(1912.12)に川上邦世木彫による木版表紙絵や扉絵を制作するほか、評論などを寄稿した。1916年齋藤与里・川上涼花らと日本美術家協会を設立。後に春陽会に出品し、1926年同会会友となる。その後の消息については調査に至らず。1946(昭和21)年頃逝去か。【文献】『フェウザン会回顧展』目録(中央公論社 1957.4) / 『近代の美術』43(至文堂 1977) / 『日本の版画 II 1911～1920』展図録(千葉市美術館 1999) / 寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現―『月映』誕生の背景を探って―」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所編 2005.3)(樋口)

#### 佐山藤一郎(さやま・とういちろう)

日本エッチング研究所主宰西田武雄は児童生徒へのエッチング普及を促進するため、研究所に東京市内の小学校教師を招き、制作過程を実際に試しながら説明し、エッチング技法の理解を深めるための「エッチング研究座談会」を開催した。その第2回は1933年4月11日に開かれ、当時、番町小学校訓導

であった佐山も参加(『エッチング』6 1933.4)。佐山のエッチング作品は研究所機関誌『エッチング』第8号(1933.6)に掲載されている。【文献】『エッチング』6・8(加治)

#### 猿田哲郎(さるた・てつろう)

長野県安曇地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎え、版画技術の研磨と会員の親睦をはかるために黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』(1937～1938)を発行した。その第1号(1937.3)に《トマト》を発表。当時、北安曇野郡陸郷小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 澤 青鳥(さわ・せいちょう)

没年不詳。七郷落ちの澤宣嘉伯爵の孫といわれる。ロシア語を学んだとされる。1924年(大正13)マヴォに参加、5月に東京神楽坂のカフェー山田で「第1回構成主義的小品展覧会」(個展)を開催、同じ月に東京小石川の喫茶店・鈴蘭で開催の「マヴォ意識的構成主義的連続展」に参加した。その時期の作品に、ロシア語の印刷物をコラージュした作品として《コンストルクチヤ》(『マヴォ』1号に図版掲載)、《コンストルクチヤ第三十七番》(『マヴォ』第2号に図版掲載)がある。このうち《コンストルクチヤ》は、機械や刃物のイメージを表したリノカット(推定)にロシア語の印刷物をコラージュした原画を写真製版し、その原版を刷った(印刷した)ものと思われ、萩原恭次郎詩集『死刑宣告』(長隆舎書店 1925)の本文最初の頁にも掲載された。《コンストルクチヤ第三十七番》はダダ的な様式のコラージュをともなった油彩画で、ほかにキュビズムの手法で描いた油彩画《コンストルクチヤ十三番》(『マヴォ』4号に図版掲載)がある。マヴォ時代以降、ロシア語の能力を活かした通信社に勤務し、フォトモンタージュを制作していたといわれる。また『グライダーの研究』(1934)など、グライダーに関する著作を残した。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)(滝沢)

#### 沢 令花(さわ・れいか) 1896～1970

資生堂のデザイナーとして知られる。本名安井頼吾。美術振興会『商業図画要義』(晩成処 1932)の「作家小伝」によれば、新潟県中蒲原郡五泉町に生まれ、1922年に日本美術学校日本画科を卒業したという(同資料では生年は1897(明治30)年)。1925年、レート化粧品広告部から資生堂意匠部へ移籍。資生堂における版の仕事としては、1926年の《花椿石鹼個包装紙》、同年の『資生堂月報』題字ロゴ(4月号/通巻19号より)、1927年の《包装紙》改訂、同年6月に創刊された機関誌『チェインストアー』の表紙デザインおよび「ポスター図案」制作、同年末の『御婦人手帳』挿絵、1926～1928年のウインドーバック(小形ポスター)がある。ウインドーバックは《オーデネーゼ》がよく知られるが、今日作者不詳のものにも沢の手になる作は多いと見られる。また1927年の《包装紙》は、1924年にピアズレーの『Volpone』の装画をもとに矢部季が描いたものを原型とするが、